

---

# この先の結末

みほ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この先の結末

### 【NZコード】

N1444V

### 【作者名】

みほ

### 【あらすじ】

あたし、あかり。幼馴染の雄輔とは腐れ縁。よく知りすぎているが故にすれ違う恋心の結末はいかに？

アメブロでも公開中です。

?

あたしと雄輔は幼い頃から仲良しだった。

家は近所ではなかつたけど

幼稚園でも小学校でも

なぜか同じクラスで

あたし達はなぜかよく隣の席になつた。

「なんだ〜、またお前とかよ。」

席替えの時、雄輔が楽しそうに叫び声、

今でもよく覚えてる。

「先生〜またあたし、雄輔と隣ですよ。」

あたしの抗議もむなし

「雄輔くんを頼むわね。よろしく」

・・・・・

「やだ。。。」

「いひせーぞ！」

また算数の答え、教えろよな

「

やんけやんな雄輔のおもつ役ですか・・・あたしは。

中学校に行くと、

さすがにクラスは離れた。

雄輔は野球部。

あたしはソフトテニス部に入った。

狭い校庭は、時々フェンスがあるにもかかわらず

ボールがあちこちに飛び出して行く。

野球のボールがテニスコートに来るのも珍しくない。

「あかり、そのボールとつて。」

フェンスの向こうで雄輔があたしを呼ぶ。

「え 。メイワク・・・・」

そいつ言いながらも、フーンスの上をめがけて

野球ボールを投げた。

「へッタクソーちゃんと投げれねーの？」

一ツと笑う雄輔。

なぜかボールはあたしの足元に落ちてきている。

「うるさいわね。ちゃんと出来るわよー！」

足元のボールを拾い、斜め上に投げた。

今度はちゃんとフーンスを乗り越えて

雄輔のもとへとボールは飛んで行つた。

「サンキュー やれば出来んじやん。」

軽く手をあげてニコッと笑つた雄輔に

なぜか胸がキュンとなつた。

それがあたしの初恋だった。

?

それからも、特にあたし達の関係は

変わることはなかった。

「おい！あかり～。

数学のノートうつせせよ。

雄輔が教室の後ろの入口から声をかける。

「何で自分でやんないのよー！」

「オレ、バカだから」

「コラと笑うその顔を見ると

ズキュンと胸に衝撃が走る。

中学に入つてからはクラスが違うのに

なんだかんだ言つては

雄輔はあたしのクラスにやつてくれる。

ま、同じ野球部の隼人がいるからなんだけど。

「オレのノート貸そうか?」

あたしの複雑な顔に気付いた隼人は

気を遣つてそう言った。

「ボケ! お前のノートなんか写したら

間違いだらけでなんも分かんねーだろーー！」

漫才みたいにバコンって丸めたノートで

頭をはたきながら雄輔が言った。

「いいよ。別に。ほら、汚すんじゃないよー。」

あたしは努めて平靜を裝つて

雄輔にノートを渡す。

「サンキュー」

あたしのノートをゲットして教室に戻る雄輔の後ろ姿を

同じクラスの女の子たちが

甘いため息で見送つていた。

「あかりはいいよね～。

雄輔君と仲良しで・・・

あたしもお話したい・・・」

苦笑いしながらあたしはそれらを聞き流した。

確かに、カッコいい。

最近特に背も高くなつてきて

気付けばあたしより随分背が高くなつてている。

何げなく触れた腕も

思いがけず逞しくて

思わず手を引っ込めてしまったよくなつた。

何も意識せずにじやれあえた小学生の頃が

無性に懐かしい・・・

「ねえ、あかり、雄輔と付き合つてんの？」

隼人に聞かれて

「あんたバツカじやない？」

何であたしがアイツと付き合つわけ？」

必死で否定すると、

「だよな・・・相手は雄輔だしな・・・」

と、妙に納得された。

それはそれで複雑だつたりすんのよね。  
.

```
> a href="http://www.alphapolis.  
co.jp/contact/access2.php?city|co  
nt|id=209016269" target="|blan  
k" <> img src="http://www.alphap  
olis.co.jp/contact/access.php?city|  
id=209016269&amp;size=8  
8" width="88" height="31" bord  
er="0" <> /a<
```

?

2年生になつたあたし達は

また同じクラスになつた。

なぜか隼人も同じクラスで腐れ縁。

相変わらず面題は見せろといつたが、

授業中寝てゐるし

中身はこつまでも成長しないな・・・なんて思つてたのに

ある日の昼休み。

人目を避けるように廊下を歩いて行く雄輔。

ちよつと照れたよつた雄輔に

なぜかじつやうつじつと行こうとこつ氣になつた。

誰もいない野球部の部室に入った雄輔。

「あ、雄輔くん、来ててくれたんだ」

「ああ。何か用か?」

「……そんなこと聞く? いまさら。」

「だよな……」

3年のマネージャーじゃない……

しかも、イケナイことしてるとかいう

ちゅうと良くない噂のある……

重なる一人の影をちらりと見た瞬間

足音を立てないよつて

あたしは戻りを返した。

足が震える。

ドキドキが止まらない。

アイツ・・・・・

何やつてんのよ！――！

勝手に一人成長してる・・・・

信じられない・・・

胸の奥が痛くて、ご飯がのどを通らない。

友達のほなみが、あたしの異変に最初に気付いた。

「何かあつたの？顔、青いよ？」

あたしは何も答えられず

力なく自分の席に座った。

別に雄輔が誰と付き合っても

それはあたしがどういひ言えた義理じゃない。

彼女でも何でもないし。

そう、雄輔の中ではただの幼馴染。

便利な宿題仕上げマシーンなのがもしけない。

そして・・・・・

女としてあんな人が

雄輔の傍にいるなんて・・・・・・

まだ誰にも触れられたことのない面にやつと触れたら  
じわっと涙がにじんできた。

おかげで、

なぜか鼻歌歌いながら教室に戻ってきた雄輔の顔は

あたしにははつきり見えなかつた。

嬉しそうな顔なんて見たくもないけど。

?

「なあ、あかり、英語のノート見せろよ。」

雄輔の言葉に、あたしは

キッと睨みつけた。

何よ。

わざわざ先輩と・・・・・・

何度も悔しくって

知らんぷりを決め込んだ。

「何怒つてんの？」

雄輔がおちやらけてあたしの顔を覗き込んだ。

一瞬周りで悲鳴のよつた声が聞こえた。

思わず顔をあげて雄輔と目が合ひ。

・・・・・

口惜しいけど、負けた。

整った顔立ちに。

優しいふりした眼差しに。

あたしは黙つてノートを差し出した。

「あかりのノートつて、分かりやすいんだよな。

サンキュー」

そう、昨日、必死になつて

綺麗に分かりやすく書きなおしたの。

雄輔のために。

テストに出そうな所は

チェックマークまで入つてる。

横からのぞき込んだ隼人が

一瞬驚いた顔になつて

そしてまじまじとあたしの顔を見た。

「これ……お前……わざわざ？」

言つな。気付いても言つな！

隼人はあたしの視線を受けて

言葉を切つた。

「雄輔、これでいい点取れなきや

バチ当たんぞ。」

隼人の言葉に

「んな」と言つても無理！

オレの頭をなんだと思つてんだ!」

と、皮な血饅をする雄輔。

あたしは、やるかない思いに

大きなため息をついた。

?

学校からの帰り道、

クツタクタになつたあたしは

ラケットや荷物を担いでとぼとぼ歩いていた。

「あかり、最近オレに何か怒つてんのか？」

いきなり後ろから聞こえた声にビクッとする。

振り返ると野球のユニフォーム姿の雄輔がいた。

「べ・・別に、何にも・・・・・」

慌てて答えた声は、ひっくり返っていた。

そんなあたしを雄輔は

面白そうに見てる。

最近の雄輔は、何だかオトコっぽくなつて  
カンが狂う。

今までみたいにじやれてはいけないような

かと言つて、他人行儀にも今更出来ない。

鞄を肩に引っ掛け

雄輔はあたしの隣を歩いていた。

それがまるで当たり前みたいに。

ちょっと前までは毎日当たり前に  
一緒に帰つてたのに

なんか妙にドキドキする。

余計不機嫌な顔になつたあたしに

雄輔はいきなり、ほつペを

「もう一回やんのよー。」

思わず振り上げた手を

軽く捕まえられた。

「お前にぶたれるほど

ト口臭くねーつて  
」

# あたしの手を掴んだまま

雄輔はニツコリ笑つた。

あたしは真っ赤な顔して

雄輔に掴まれた手を振り払う。

腹立つけどなんだか嬉しくて

だけど照れくしゃくて・・・

なんだか不思議な甘い気分だった。

そんなあたし達をちよつと離れた後ろから

たくさんの田が見ていたことを知るのは

翌日のことだった。

?

ある日、あたしの上履きが消えていた。

よくある嫌がらせだけど、

その原因があたしには思い当たらない。

周りを探すと、

下駄箱の近くの植え込みの中に

放り込まれていた。

「誰よ・・・こんな」とすんの・・・・

ため息をつきながら

土を払つて上履きを履いた。

教室に入ると、あたしの机は少しゆがんで置いてあった。

「誰かぶつかったのかな？」

セイジやないと感じつつも

誰ともなくつぶやいた。

やつであつて欲しかつたし。

休み時間、あたしはトライへくと急いでいた。

教室移動のために

ちゅつと時間が迫つていて

忙しかつたから……。

そんなときに限つて厄介なことに巻き込まれた。

「ちよつと、調子に乗つてんのってあんた？」

「へ、あたしじゃないです。」

「よく言つよー。」トマツだつてー。」

何のこどー。

何であたしは、からまれてんの？

「雄輔に付きまとつてんじやないよ。」  
「 ブラウスの襟首を掴まれる。

「雄輔は香織の彼氏なんだかんね！」

「ちよつとあ。まだそんなんじやないつて。」

香織ところのせいの人か・・・

ちよつと見たその人は・・・

いつぞやのマネージャー・・・

そういう事・・・なのね？

照れながらも、あたしを睨んで言つた。

「でも、あんたに手出しされたくないんだよ。

分かつてゐる？」

意味分かんない。

あたしがいつ雄輔に手を出した？

「分かつたら雄輔には手を出すなよ。」

乱暴に突き放されて

ブラウスのボタンが一つ取れた。

転がったボタンを黙つて拾う。

あたしが一体何したって言ひの？

ムカムカつとして、あたしは半ば切れた。

「あたしは別に雄輔に手なんか出してませんー

変な言いがかり付けないでください。」

一応先輩らしいので敬語。

でも、睨みつけながら思いつきつ不機嫌。

バチン！――！

盛大な音が響いて、数秒後に

頬に痛みを感じた。

「生意氣！いい加減にしたらう？」

捨て台詞を残して

チャイムと共に消えて言った先輩たち。

口惜しくてこぼれそうになる涙をギュッとこらえて

遅刻して教室を移動した。

「ひらー何でおくれ・・・」

と言いかけた先生が思わず口をつぐむ。

「遅れてすみませんでした。」

一言言つてあたしは自分の席へ。

クラスのみんながあたしの顔を見つめる中、

何とか涙をこぼさずに

席に着くと、何事もなかつたかのよう

あたしはノートを取り始めた。

?

授業が終わるのを待ちかねたように

ほなみがやってきた。

「何かあつたんでしょう？」

「・・・・・」

心配そうな顔されて何も言わないのも

ものすいじへ気が引けるナビ

今口を開くと、涙も出てしまつだから・・・

と、その時、雄輔が

「これ持つて帰つといてくれ。」

と、ほなみにあたしの荷物を持たせると

「来い！」

つて、手首を掴まれて引っ張られた。

ほなみは、雄輔に手渡されたあたしのハートと

あたし達を見比べながらも

なんだか嬉しそうな顔してゐる。

「やめてよ。」

あたしの抗議もむなしく

雄輔は足を動かすスピードを緩めない。

そのままあたしは誰も来ない

階段の踊り場に連れてこられた。

「誰に絡まれた？」

「からまれたとか言つてないけど？」

いきなりのストライクな発言に

びしゃみしがら笑えると

「それ以外にお前が、ンな顔するわけねー。」

つて、せりぱり言い切つた。

「ちよつとへりこのことない

あかりのくせに、へこたれたりすつかよ。」

バカにすんなど言わんばかりの雄輔の言葉に草に

ちよつと笑つてしまひ。

でも、言えないよ。

相手はあなたの先輩だなんて。

この前あんな嬉しそうな顔して

一人で会つてたんだしょ・・・

あたしは無理に笑顔を作ると

「雄輔には教えてやんな～～い」

つて、ふざけて逃げよひとした。

そうでもしないと完璧泣くから。

なのに・・・あのバカ・・・

「オレにも言えねーつて?」

つて呟くと、いきなりあたしをその腕に閉じ込めてきた。

一瞬体が硬直した。

怖い？

イヤ違う……

びっくり……？

ちょっとやうかも。

でも一番の原因は、雄輔だったから。

あたしの恋心に拍車かけてびっくりするのよ……

つたく……

?

どうしていいものやら、

こうこう経験はあまりないもんに戸惑つたけど

雄輔の胸を大きく突き放して

「雄輔のせいだかんね！」

つて、一言捨て台詞のように残すと

あたしは教室へ走つていった。

「オレのせい？」

ポツンと残された雄輔が

意味分かんねーって顔して立つている。

「オレがなんかしたあ？」

いくら考へても思い当たる節がねえし・・・

しうがねーな・・・

見張るか・・・

\* . . 。 o . . ' . \* : . . o \* : . . o . .

「あかりい」

王子様に連れ去られたお姫様みたい

」

教室に帰ると

あたしの重く重い気分とは裏腹に

これ以上ないくらいのテンションのみんながいた。

そりやがりか・・・・・

泣きそうな顔してたあたしを

有無を言わせず連れ去つた雄輔。

嫌でも噂になるよね・・・

「で、どうだつたの？」

「何言われた？」

「慰めてもらつたりした？」

「それ――何とかされたの？」

ややあ~~~~~  
つていう雄たけび。

あなたたち、絶対心配しないだろ。

楽しんでんじやん・・・

?

人の噂なんて、あたしは大つきらいだあ！！！

あつといつ間に雄輔との噂は広まつて

その内容も、

『授業が終わつて、雄輔くんにあかりが連れてかれたらしいよ。』

『へー、どこ行つたんだろうね・・・』

『授業が終わつてから雄輔くんとあかりがどつか行つたらしい。』

『えー！一人で？マジ？』

『授業が終わるとすぐに一人で消えたらしいよ。』

『どつちが誘つたの？』

『しじなーい。でも、雄輔くんが誘つたりする?』

『じゅ、あかり?』

『授業が終わつた途端、

あかりが雄輔くんをどつか連れていつたらしい。』

なんていつ伝言ゲーム。

あのね・・・・・

事実はじゅんと確認しそひよ・・・・・

あたしの心配なんて、あつけなく実現すんのよね。

テニス部の練習を終えて

ボールを片付けていたら、いきなり横から先輩たちがバラバラッと現れてぐるりと囲まれた。

あ・・・休み時間の先輩たち・・・

「ちょっと聞きたい」とあるんだけど?」

「いやかな顔で

なぜか狭い野球部の部室に連れ込まれてしまつ。

笑顔が逆に怖いです・・・。

「雄輔に手出しまはしないでって言つたわよね?」

グイッと一歩近寄られて、思わず後ずさり。

「どうこつもつ？」

ンなこと言われてもですね・・・

「それは俺のセリフだな。」

思わず振り返る。

部室の入口には、夕陽をバックに雄輔が立っていた。

?

「何でオレのせいかと思えば・・・

だったら、それをおもう言えー！

ほら、帰んぞ。

つかつかっと部室に入つてくるなり

雄輔はまた、あたしの手を掴んで

外へ引つ張り出した。

雄輔くん！

マネージャーがあたしの腕を捕まえて

睨みつけながら言った。

「あんた、あたしのこと好きだつて言つたじゃん！」

「え？ そんなこと言つたの？」

「ああ、言つたよ。

オレ、仲間やダチはみんな好きだぜ。

ただなあ・・・」

雄輔は言葉を切つて

マネージャーとその周りの女の子たちを見回して行つた。

「あかりはちつこい時からの大事な友達だ。

オレの大事なヤツを傷つけるヤツは

誰であつてもぜつて一ゆるわねー。

今度こんな真似したら、

女だからって容赦しねーし。」

背中が冷たくなるよつなまなざしを向け、

彼女たちを睨む雄輔。

力なくあたしの腕を離したマネージャー。

雄輔は振り返りもせず

あたしの片付けを手伝い、

「フヨ。ほんとにオレのせいだつたな。」

つて、ほそつと謝った。

・・・・・・・・・・・・

「でも、小さな時はやつせと言へよ。

めざのひにこじりしなくても

ちやんと助けてやつから。」

「別に助けてもらわなくつたって

大丈夫だもん。」

可愛くない返事をしたあたしに

雄輔が正面で立ち止まる。

そして、あたしの頬にそつと手を当てた。

いきなりな行動に心臓は暴走気味。

「小さな風に一度と傷つけられたりすんな。

バー カ。」

そう言って二ツコリ笑つた雄輔の眼は  
いつものように優しかつた。

? (前書き)

ちょっと実験です。  
アメブロからお越しの皆様、ありがとうございます

?

雄輔の笑顔は小さい時から見慣れてるけど  
今日はマズイ・・・  
家に帰つても勉強どころか

何にも頭に入つて来やしない・・・

それどころか、

気付けば雄輔のことを考えてるあたしがいて  
ぼんやりすることが増えた。

そして、今日は朝からなんだかおかしい。

まず、教科書がない。

あれ?忘れてきたっけ・・・?

筆箱の中に消しゴムもない。

・・・・?

だめだ・・・重症？

こんなことじやあたしダメ！

頑張んなさいよーあたし！

と叱咤激励しつつも、

あれ？

今度はノリもない・・・

体育の授業中、

少し気分が悪くなつてきた。

あ・・・・もしかして・・・・・？

そろそろ予定の日だつけ・・・

体育の先生に気分が悪いことを伝え、

保健室に行かせてもらつた。

そのついでに教室に寄つて

鞄の中からアレ、取つてこよつ・・・

中途半端な時間に誰もいない教室に戻るのって

初めて・・・

ガラツと、ドアを開けたら

誰もいないはずの教室に

しかもここは1年の教室なのに

3年生がいる。

野球部のマネージャーさん・・・

おまけにあたしの席にいる・・・

その手にはあたしの筆箱があり、

お気に入りのシャープペンが握られていた。

その瞬間、あたしは悟った。

朝から、ボーネーつとしてたせいじやなく

教科書も、消しゴムも、ノリも

次はシャープペンまで消えそうになっていた理由を。

「サイマー・・・

そんなことにして恥ずかしくないんですか？」

ムカムカがひどくなってきた。

「あんたが悪いのよ。

せつかく仲良くなれたのに・・・・・

うなだれるマネージャー。

「卑怯者って、雄輔が一番嫌いなヤツですよ。

あたしは保健室に行きますから

ちやんと返してくださいね。他の物も。」

やつて教室を出る。

「雄輔さんなの?..?」

泣き声が聞こえた。

「言われて困るやつなことは

やめた方がいいと思います。」

それだけ答えると

あたしは、教室を後にした。

?

それからじょじょに何事もなく

平穏に過ぎ去つていつた。

あたし達は相変わらず、

中学生生活を満喫していたけど

2年生になつたころから

進路が気になり始めた。

「いつ言つちゃなんだけど

あたし、学年トップクラス。

進学先は地元の進学校と決めている。

でも・・・

雄輔は、野球に明け暮れ

友達と遊びまくり

最近はといふと、生徒指導の先生にお世話をなることも多くなつてきた。

「いらっしゃー！雄輔ー！お前またそのズボンー！」

「うつせーな。このくらーいいだろー。」

「ちよつと職員室に来いー！」

そうして渋々職員室へとついて行く雄輔。

授業時間も寝てることが多くなつてきた。

野球部は毎朝朝鍊を欠かさない。

7時には雄輔もグラウンドを走っていた。

そりやくたびれもするか・・・

そんな雄輔の分もノートを取るのが

最近のあたしの日課になつた。

こんな生活ももうすぐ終わっちゃうのかな・・・

いつも一緒にいた雄輔が

同じ学校にいないところは

頭で理解してみてもさつと寂しいだらつと黙つ。

はあ・・・

このままていられたらいいのにな・・・

「つたぐ・・・高橋のヤツしつこいんだよ・・・」

規定通りのズボンに履き替えて

教室に戻ってきた雄輔は

生徒指導の先生にこつてつら絞られたみたい。

そりゃ仕方ないね。

最近の雄輔はちよつと近寄りがたい雰囲気を醸し出している。

相変わらずカツコにこと尊敬にはなるけど

正直怖くて敬れない・・・と、もっぱらの尊。

あたしとこねとあせ

小学生のころと向り変わらないんだけどね・・・

「雄輔、ほれ、今日のホームページ。」

「サンキュー」

「ちやんと勉強しなよ。」

「なんで?オレ、勉強嫌いだし。」

・・・・・・・・・・・・

あたしは知つている。

雄輔、ちゃんとやれば数学なんて

あたしよつ出来るようになることを。

本人の自覚はないけど。

なのに・・・悲しいなあ・・・

高校だつて雄輔と一緒に通えたら嬉しいと思ってるの

あたしだけみたい・・・

「じゃ、もう、ノート見せない。」

「どうして?」

その問い合わせに答へずあたしは教室を出て行つた。



?

「あかり～い なあ おい！」

あたしの周りをうろちゅうしては

れっきから目を合ひやうとする雄輔。

ノート貸さない宣言をしてから

雄輔はほんとあたしからノートをもらえないくなつて

しかも、

あたしの全知能と甘い想いをこめて作った

雄輔仕様のノートだつた為に

ヒーつても分かりやすくて

他の子のノートでは、

もはや物足りなくなつたらしい。

あつたりまえじゃん。

あかりさんをなめんじゃないわよ

そんなに簡単に落ちてたまるか。

あたしが一旦貸さないと言つたら

そう簡単に貸すわけないでしょ

なぜあたしがこんなにルンルンかと言えば・・・

実は、野球部にはある撻が存在した。

学力が前回のテストよりも

トータル30点以上落とすことがあれば

じつあがいてもレギュラー入りは出来ない。

と。

今まであたしのハートで

点数を稼いできた雄輔について

まさに死活問題。

レギュラー取れないなんてアツシにひとつや

屈辱以外の何物でもない。

そして・・・・・

雄輔が、そんなことは死んでも認められないってことを

あたしはよーーーく知っている。

間もなくテスト1週間前といつこの時期に

あたしのハートがないことじうにもならないと

切羽詰まっていた。

「だつたら授業中起きて授業聞いてればいいじゃん。」

「ンなこと無理イー

いい加減機嫌直して貸せつてば。」

あたし達の話を聞いていた一人の女の子が

「雄輔くん、あたしが貸してあげるよ

あかりのじゃなくともいいでしょ?ほひ。」

ほっぺをピンクに染めて

一大決心をして話しかけたんだろう。

なのに、雄輔の言葉でその顔は一気に青ざめた。

「余計なことすんじゃねーよ。

オレはあかりに言つてんの！

つづーか、あかりのじやねーと役にたたねーんだよー。」

「そんな言い方しなくても・・・

「中身は同じでしょ」が！」

青い顔しながらも精一杯の言葉を返す。

でもね・・・残念ながら同じじゃないんだな・・・

「おんなじじやねーよな。あかり。」

「ヤツと笑つた雄輔。

もううんうんです。

「何が違うのよ。」

あたしの方が字も綺麗なのに。」

・・・・・悪かつたわね・・・・・

「ン～～

強いていえば愛情?」

思わず噴き出しちゃうになつたわよ。

雄輔のアホ!

ほら・・・みんな大騒ぎしてんじやないの・・・

はあ。



?

みんなの騒ぎをみて動搖したあたしに

雄輔はニヤッと笑ってダメ押し・・・

「んじゃ、今日はお前んちにノートもらうに行くからな。  
あ・・・くれるまであかりの部屋に居座るつかなあ」

あーあ・・・・・

みんなを無意味に刺激してどうすんだ?

雄輔・・・

冷静にその場を見ていたあたしの心とは裏腹に

顔はどんどん赤くなつていった。

もつその辺にしつかないと・・・・・

「何の一人……」

「んなどこちやこちやしてんじやねーよな。」

聞えよがしの誰かの言葉に

雄輔のふざけてた顔が一変した。

「誰だ？ 今。」

れつあめでのおしゃらけ雄輔はびくしゃり

三つ巴の鋭くなつた雄輔が

若干低い声で言つた。

・・・・・・・・・

「誰が言つたつて聞いてんだよー。」

がしゃんと大きな音を立てて

雄輔が机を蹴つ飛ばした。

し んと、妙な空気が流れた。

「ほり、授業始まんぞ。」

みんな席につけよ。」

ドアをガラツとあけて先生ののんきな声が聞こえた。

みんな慌てて席に着く。

「ほり、雄輔も。さつさと座わんの。」

小さい声であたしが促すと

雄輔はふてくされた顔して席に着いた。

「んじやー、48ページ開けて。」

空氣の読めない先生でよかつた

多分雄輔を除くほとんどの全員がそう思つて

おとなしく教科書を開く。

・・・・・・・・・・・・  
それ以上は

みんなに迷惑掛かりそうだな・・・

つて、あたしのせい?

なんだか腑に落ちないけど

今日は、ちやんと雄輔に話してみよ。

一緒に高校行こうつて。

ちょっぴり照れながら

そんなこと考へてゐあたしの横で

相変わらず雄輔は目を閉じ眠つていた。

いや、眠つてゐふりをしていた。

?

「やつぱりあかりのノートはサイローだ

ここはあたしの部屋。

「雄ちゃん、久しぶりね。」

## お母さんの歓迎ムードに

「はい じゃ、遠慮なく。」

と、ちやつかり乗つてゐる雄輔。

「うよつては繩子になさよ。

「おぬれ、おまかせをあたまにいじだし」

あたしの方見向きもせず

必死でノート読んでる雄輔。

「取り合えず現状維持が目標だかんな。

時間もねーし。

マジで助かった・・・・」

ちりつと皿をあげて

心底嬉しそうに笑う雄輔。

この笑顔に負けたあたし。

でも、言いたいことはちゃんと言つておいで。

「雄輔、ノートはひやんと見せてあげる。

ただし、約束守つてくれたら。」

「オッケー。あかりとの約束なら

なんだつて守つてやつから。」

余裕な顔して言つた雄輔。

ふーん、言つたわね。

「男がやつぱ無理、とか言わないでよね。」

「あたりめーだる。」

「じゃ、同じ高校に入つてね。」

「はあ？」

一瞬雄輔の顔が固まつた。

「無理とか言わないでよね。約束だかんね。」

・・・・・・・・・・・・

顔に無理と書いてある。

でもそれを言わせるわけにはいかない。

「あたしは雄輔と同じ高校に行きたいの。

でも、雄輔にレベルは合わせないから

あたしの言葉に雄輔が固まりつつ

じーーーっとあたしの顔を見つめる。

あたしも田をそらわない。

「」では負けるわけにいかないっしょ。

結構苦痛な時間。

ドキドキしてきたじゃない・・・

と、その時、雄輔の視線がふと下にされた。

ため息とともに

「しゃーねーなあ・・・

お前、オレの成績知つてて言つてんのかよ・・・

と、声が聞こえた。

それつきつ雄輔は何も言わず

ノートを見つめていた。

そしてそんな雄輔を

あたしもなにも言わずに見つめていた。



?

授業中、雄輔が起きていた。

周りのみんなは今までにない事態に

興味津々。

時々雄輔に睨まれて慌てて手をそらす。

「雄輔くん、起きてるなんて雪でも降るんじゃない?」

「んなわけないでしょ。今夏だし。」

友達の言葉にも冷静に返すあたし。

でも、その理由はあたしと雄輔だけが知っている。

あの後、固まっている雄輔に

「ちゃんと約束守つてよな。」

つて念押ししたら、

「くどい！オレが約束破るわけねーだろー。」

つて、変に開き直られた。

「だからって、オレたち、友達だろ？」

協力はしてくれんだろうなあ？」

ニヤッと笑った雄輔から持ち出された交換条件。

時間のある限り勉強に付き合つこと。

いつ言つちやなんだけど

密かにものすごい嬉しかつたりする。

で、かつたるそな格好してはいるけど

一応授業は聞いてる。

聞こてるのさうか、ひひんと理解してる。

頭の回転は速このよね。雄輔。

「最近雄輔くん、何か変わったよね。」

「ほんと。真面目な顔してること増えたよね。」

田がハートマークの女の子たちが

嬉しそうに話しながら部活の片付けをしていた。

もつと始めた。

今田はなんだかんだ遅くなっちゃったな・・・

「あかり、おはーよ。」

尊の主がいきなり現れて

会話中の女の子たちは一気に盛り上がる。

でも、雄輔の言葉を聞いた途端、

一斉にあたしに視線が集まつた。

「「めん。」

最近何事にもめげなくなつたあたしは

それだけ言つと雄輔の隣を歩く。

何気なくいつも車道側を歩く雄輔。

そうこうついでにキヨンとする。

あれから雄輔とあたしは毎日  
どちらかのうちで寄つてか  
り

自分ちに帰るよひになつた。

約2時間の一人での勉強が日課になると

あたし達の親は眞面目に勉強してゐるのを

応援してくれるようにもなった。

いつしか、周りのやつかんだ

視線なんて気にならないほど

あたしは強くなつた。

そして、いつか、雄輔の隣はあたしと

誰もが認識するようになつた。

そして・・・

雄輔の成績はあつといつ間に

周りのみんなが驚くべらによくなつた。

「ほら見ろー。オレつて出来る子だろ?」

嬉しそうにテストの結果を見せる雄輔。

「まあまあね。教える人がいいから」

なんておどけてみるけど

ほんとに合格圏内に入る勢いで成績は上がっている。

本当に嬉しかった。

3年生になるまではすべてが順調で。

毎日が幸せだった。

なのに・・・・・・・・・

幸せが壊れるのって

ほんと一瞬の出来事だと

あたしはその時まだ

ちっとも知らなかつた。

?

それはちょっととした出来心からだつた。

「ふあ～～～眠い・・・」

ぱたつと倒れるよつこじてひっくり返つた雄輔。

「」は雄輔の部屋。

「」のようになたし達は

部活のハードな練習を終えたのち

いつもひつて勉強していた。

宿題をやっていた雄輔は

大きなあぐびと共に

「10分だけ寝かせて・・・ZZZ」

つて、速攻寝てしまつ。

無理もない。

朝から田舎の運動場を走り回っていたもん。

あたしは、雄輔の寝顔をじっと見つめた。

小さい頃から見慣れた顔だけど

やつぱりカッコによなあ・・・

・・・・・

一瞬魔がさした。

大の字になつてゐる雄輔の傍に

そつと寝転がつてみた。

やん 一緒に寝てるみたい

なんて一人くすつと笑つてしまつ。

横から眺める景色つてまた違つたのよね。

ちよつとしたいたゞら氣分も満足し

時計を見て雄輔に声をかける。

「雄輔・・・そろそろ起きない?」

「10分たつたよ。」

腕を突つついてみたけど反応なし。

ボールを投げてゐる腕は

同級生より筋肉もついて逞しい。

ちょっとだけ腕枕

なんて腕に頭を乗っけてみたら・・・・・

「んん・・・・・」

つて雄輔が寝返りを打った。

あたしの方に。

あたしは抱き枕のようにしつかり抱えられて

幸せそうな雄輔の寝顔を見る羽田になつた。

・・・・・

おい・・・・・

これはひょっと・・・・・

まずいんじやないの・・・・?

ドキドキと照れくわわと嬉しさの入り混じった

妙な感覚。

ああ・・あたしはやっぱり雄輔が好き



?

「キドキしながら現在の状況に

ちよつひとつときめいていた時、

とふとふとふ・・・と、

階段を上がつてくる足音が聞こえた。

勉強始めて1時間くらいすると

こつもお座りたちはお茶とお菓子を出してくれた。

今日もその時間だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「雄輔ー。ちよつと雄輔つづけー。」

「…………うわー…………」

起きない……

つていうより、早くここから抜け出さないと……！

もがくあたしを雄輔は逃がしてくれない。

無意識に抱き枕にしてる……

「頑張ってる? はーい、お茶持つて来たわ……よ。」

雄輔のお母さんが一瞬固まり、

そして、はっと我に返つてお盆を側に置くと

「雄輔…………」

つい、ぱつぱつと頭に一発張り手が飛んだ。

「こつてえ・・・・」

と、わすがに田を覚ました雄輔が  
何すんだよとすいむ前に

あたしが腕の中でもがいでいるのと

お母さんのが田の前で「王立ちして

げん」つ握りしめて爆発寸前なのを見ると

一瞬で責ざめた。

「あ・・・えつと、これはオカン、違つんだ、

オレはなんも・・・・」

慌てて雄輔はあたしから腕を離す。

「雄輔、ちよつとおいでー」

と、雄輔を引かねばならぬと連れてこへおゆる。

そして、あたしを振り返ると

精いっぱいの笑顔を浮かべて

「（めんねあか）ちゃん、

このバカがひどい」とつて。

悪いけど今日は帰つてくれる？

と、あたしの返事も聞かず

ねえさんは雄輔を引つ張つて行つた。

「オレは別になんも……」

弁解をしようとする雄輔を

「黙つてなさい！」

と、一喝しながら。

あたしは・・・・・

何も言えず、とまどまとすぐ近くの血圧へと戻った。

「早かったのね・・・・・

と、何も知らないお母さんに言われ

胸の奥になんとも言えない痛みを抱えながら

あたしは自分の部屋に入った。

・・・・・・・・・

あたしのせいだ・・・・・

あたしがちゃんと勉強してれば

こんなことにはならなかつたのに・・・

あつと今頃、雄輔はこつてり絞られてんだらうな

あたしのせいで・・・・・

?

「うわあー雄輔、誰にやられたんだよー。」

俺らの知ってるヤツか?ビートの母のヤツ?」

教室へ入ってくるなり

雄輔は友達に驚きの声をかけられていた。

あたしも思わず2度見したわよ。

だって・・・・・

「うわせー。お前らにはカンケーね。

転んだだけだ。」

・・・・・・・・・・・

明らかに誰もがウソと分かる言い訳。

雄輔の顔は口の横が青く腫れ、

頬も赤く腫れていた。

あたしは思わず「つむいて唇をかみしめた。

あーあ、おじさんもおばさんも

雄輔が無理矢理・・・つて思つてるんだ・・・

確かに、あたし、逃げよつとして暴れてたしな・・・

素行の悪かつた雄輔は

現場を押さえられどうもなかつたんだろ？。

それに本人無意識だから

説明のしようもなかつたはず。

あーあ・・・やつぱつあたしのせい。

その日、雄輔に

「あかり・・・・ちよつといいか。」

つて、お休み呼び出された。

誰もいない校舎の裏で、

「オレ、昨日のこと何も覚えてねーんだけど

お前にひどいことしたのか？」

つて聞かれた。

「ハハハ。

雄輔、ごめんね・・・痛かったよね・・・」

「みあげときそうになる涙を抑えて

あたしは謝った。

「んなじとあ、どうでもここにナビよ、

何であんな風になつてたか、

さつぱり分かんねーし。

やつぱりオレのせい?」

「それは・・・」

あたしは言葉が見つからなかつた。

雄輔は確かに寝ぼけていたんだろう。

でも・・・・・

確かにあたしが悪かつた。

なのにあたしには言えなかつた。

雄輔がなぜあたしを抱き枕にしてたのか。

雄輔に添い寝してみたかったなんて

多分口が裂けても

あたしには言えっこない・・・

「メン、雄輔・・・・



?

「ほなみ、一緒に帰る。」

部活の後、あたしは最近ほなみと帰る。

あの日以来

雄輔はぱつたりあたしにかまわなくなつた。

つていうか・・・

「オトンに、あかりの2メートル以内に入るなつて

思いつめりづくも刺されてさ・・・・」

雄輔、あんたそれ言いながらあたしとの距離

1メートルもないけど・・・

「別に手出しあるわけじゃねーのになあ。

・・・・って、あれは出したことになんのか?」

ぼやきながらため息つく雄輔。

「え？ 雄輔、あかりに手え出したの？」

「マジー——？」

隼人が話に割り込んできた。

「お前にはカンケーねーから。」

ヘッドロックを決める雄輔。

で、隼人のギブアップも何気なくスルーしながら

「無事高校生になつたら文句ねーだろ。」

「ま、それまでオレ、頑張つてみつから。」

最上級の笑顔を見せて

そんなことをいう雄輔に

思わず笑つてしまつた。

「じゃ、高校合格したら

この前の真相を話すことにするわ。」

「へ、あたしも一ヶ二つ。

その言葉に雄輔は固まる。

「…………

それって今じゃダメな理由でもあんのか？」

じつと顔を見つめ、あたしの答えを待つ雄輔に

あたしはじつしても答えることはできなかつた。

雄輔が大好きだから

雄輔にくつづきたかつたなんて

そんなこいつはずかしこと

公衆の面前で（誰もいなくとも）

言えるわけありませんって……

それに……

今だつて仲良くしてる友達なのに

改めて付き合ひてくださいとかいうわけ？

んなこと言われちや雄輔だつて困るだろ？

「多分雄輔が困るから言えない。」

「…………」

雄輔は渋々納得はしてくれたけど

困るのは雄輔じゃなくて

ほんとはあたしだつたみたい。



時が過ぎるのは早い。

受験生となつてから、人目につかないようになつた。

勉強始めた雄輔は

3学期にはあたしと同じ高校へと願書を出していた。

やれば出来んだよ！

そう言つていた雄輔。

そんな雄輔がまぶしくて

雄輔が頑張つてゐるから

あたしも頑張らうつて・・・

そつ思つてこの一年頑張つてきた。

「卒業式の日、ボタンもううんだ」

何人かの子が嬉しそうに話しているのを聞くと

あたしも雄輔に・・・・つて思つ。

きっと嫌つて言わないよね・・・・

「雄輔くん、ちよつとー。」

間もなく卒業といつある日

隣りのクラスから雄輔に呼び出しがかかつた。

呼んだ子は、友達を後ろに連れていく。

「ほりあ、呼んだげたわよ。」

「え、でも……。」

「でも、じゃないって。じゃ、頑張ってね。」

渡り廊下で雄輔は隣のクラスの子と

一人で向かい合っている。

「何か用？」

「あの……これ……読んでくださいー。」

真っ赤な顔して雄輔に一通の手紙を押しつける。

そのまま帰されるのを恐れるかのよつこ

全速力で逃げていった。

残された雄輔は、小ちく息を吐くと

くすりと笑つて教室に戻つて來た。

「ラブレターもうつたの？」

「……………知らん。」

「読まないの？」

「……………」

雄輔はそのままくしゃつとポケットに突っ込んで

何もなかつたかのように友達としゃべり始めた。

雄輔は明らかにさつきの手紙を意識している。

それなのに「で開ける」とも出来ず

そわそわしている。

あたし・・・・・・もしかして

遅れを取っているんじゃないだろうか・・・

ふとそんなことを思つた。

ず つと好きだつたけど

一度も好きだと言つたことはない。

もしかして、雄輔に彼女が出来たら・・・

なんて考へると背中に寒気が走つた。

下校しているのを見ると

そして、数日後に雄輔がその子と肩を並べて

まるで、

ナイフを差し込まれたように胸の奥が痛んだ。

残り少ない中学生活。

まさかこんな結末を迎えるなんて・・・

雄輔は、

上へ隣の組の女の方と一緒に立つようになった。

受験まで後わずか。

こんなところで勉強が手につかなくなるなんて

どうすのよあたし・・・

授業はもうすべて終わって

毎日復習のみ。

あたしのハートが雄輔に必要とされることがなくなつた。

あせる。

あたし達が培つてきた友情はどうへ消えやつた？

恋のかけらもなかつたの？

あの時の抱きしめられた感触は  
いつまでも忘れられないで

あたしの体に残つているのに？

ふと氣を抜くとそんなことばかりが

頭の中を回つてゐる。

帰りがけ、席から立ち上がりつとして

クラシと立ちくらみに襲われた。

「あかり、顔色悪いよ？」

ほなみに言われて、苦笑する。

そりゃそうだね。

昨日、だつてほとんど寝てないし。

勉強してたわけじゃなく

そりゃちよつとくらじしてたけど

気になることがあると眠れなくなる。

「そう？ ははは・・・・・」

乾いた笑いを他人の声のように聞きながら

あたしは机に突っ伏した。

あーーーしんど・・・・・。

「調子ワリいのか？ 無理してんじゃねーの？」

そう言いながら

雄輔があたしの鞄と自分の鞄を重ねて持つと

「立てるか？ 帰んや。」

つて、腕を掴んだ。

「別に大丈夫だから。」

と言いつつ、嬉しさを隠せないあたし。

最近ほどとんどしゃべらなかつたくせに・・・

と思いながらも頬が緩む。

背中に冷やかしの声を聞きながらも

笑顔がこぼれて隠せなかつた。

教室を一步出ると、

「雄輔くん・・・」

と、聞き慣れない声がした。

呼び止められたその声に

あたしもつい振り向いた。

あ・・・隣の組の・・・

「あ、今日はコイツと帰るわ。

「メンな。」

雄輔はそれだけ言つとまた前を向いて歩き始めた。

あたしの背中には彼女の痛い視線が

ずっと突き刺さつていた。

「雄輔、あの子と付き合つてんの・・・？」

思い切つて聞いてみる。

「え・・・？」

一瞬びっくりした顔して

すぐに一ヤツと笑つて

「妬ける？」

と聞いてきた。

ところがそれは肯定？

「じや、あたしはもういいから鞄、返して。」

と、手を出した。

「やだね。倒れて怪我でもされちゃ

夢見ワリいだろ。」

吐せば飯までしつきた。

雄輔はあの子と付き合つてるんだ・・・

だからあのナ、

ああやつてあたしを睨んで・・・

「睨まれるよりましよ！」

それ以上は何も言えなかつた。

口惜しいけどあたしが遅かつたんだね。

涙があふれてきて

慌ててハンドタオルで顔を抑えると

いきなり廊下を駆け抜け

階段を走り降り

下駄箱でスリッパを脱ぎ

靴を履き変えようとした所で

雄輔に手をぎゅっとつかまれた。

そこであたしの逃走は終わりだつた。

あたしは嗚咽を抑えきれずに

泣き崩れた。

当然のことながら注目を集めのあたし達。

「おー！何やつてる！」

先生が噂を聞きつけてやつてきた。

泣き崩れてるあたしも

ちゅつと冷静になつてくる。

「雄輔！お前また何しでかした！」

先生の怒声に

「何もしてねーよー！」

と、むくれながら答える雄輔。

「大丈夫か？雄輔に何されたんだ？」

あたしを覗き込むようにして

尋ねる先生。

「だから何もしてねーっつってんだろー。」

「お前は黙つてろー。」

・・・・・

泣いてる場合ではない・・・・・

やせりこへなつたり、うつとおこつ・・・・・

「雄輔が・・・・・」

泣きじやへつながらも答へる。

「ん? どうしたって?」

「助けてくれました。」

「はあ?」

先生、悪いけど期待外れです。

問題児の雄輔だけどね。

「気をつけ帰れよ。」

「オレがちゃんと連れて帰る。」

「それが心配なんだよ。」

「うつせり。ほら、行くぞ。」

いつの間にかあちこちに人だかりができる

じっとこいつを注目している。

その中を雄輔はためらいもせぬ

右手に鞄2個と

左手にあたしの手を掴んで

校門を出た。

バカたれ・・・

どんだけ好きにさせんのよ。

手を引っ張られて歩きながら

あたしは胸の中でそつと呴いた。

「あかり……何か怒つてんのか？」

帰りながら雄輔が言った。

「んなことない。」

怒つてると言えれば怒つてるかもしれないけど。

「んじゃ、俺ら、友達だよな。」

何かみずからこ事言つなよな。」

友達……か。

・・・・・・・・・・

そつか・・・そつだよね。

あたしが雄輔のこと友達を思えないだけで

雄輔の中ではあたしはオトモダチ・・・

「で、なんで泣いたんだ？」

何かあつたんだろ？」

オトモダチのあんたに言えるような理由じやない。

「オレれあ、あかりのこと好きだし、

これからも今までみたいに

ノート見せてもらつたり

バカな」と言いあいしたりして一から

お前の言つ通り勉強も頑張つたしわ、

良い友達だろ？オレ　」

ほんつつとにバカ……………！

あんただけだよ、そんな風に思つてんのは。

「オレ高校行つたら、部活楽しみにしてんだ

部活引退してから体がウズウズしてさあ。

早く4月になんねーかなあ　」

4月・・・かあ。

隣を歩く雄輔をそつと見上げる。

「高校、一緒にに行けたらいいなあ。」

ボソソッとつぶやくと

「ああそうだな。」

そう言って雄輔もあたしを見た。

高校と一緒にに行けたら・・・・・

こんな日がもう少し続くんだ・・・・・

「高校でもテニスすんのか?」

雄輔に聞かれて

「分かんない。」

と答えると

「マネージャーやんねー?」

高校つて、マネージャーいるじゃん?」

つて、言つ。

マ・・・・・マネージャー?

あたしが?

・・・・・・・・・・・・

それ楽しそうかも・・・

一人で高校生活に想いを馳せながら

笑顔が戻つたあたしを雄輔は

ほつとして眺めていた。

あたしは、泣いていたこともすっかり忘れ

雄輔と今までみたいに話しながら

気分がとても落ち着いてきた。

「やつと、いつもあかりに戻つたな。

じゃ、また明日な。」

いつしか家は目の前で

名残惜しく思いながらも

あたしは珍しく笑顔でただいまを言えた。

ほんと、久しぶりだな。

こんな気持ち。

もしかして雄輔欠之症だったのかな・・・

学校の先生たちが驚くよつな

ラストスパートをかけて

雄輔はあたしと同じ高校に進学した。

「やめとけや、やめんだよ」「

ピースサインで嬉しそうな雄輔。

高校に入った途端、

いろいろな学校の子たちが

「ねえ！雄輔くんって彼女いるの？」

と、騒ぎ始めた。

またか・・・

あたしはびつせオトモダチだもんね・・・

「誰か気になんのか?」

・・・・・・・・・・・・

「好きなヤツがいるから付き合えない。  
つて言つたらあきらめるぜ。大抵。」

「好きなヤツがいるから付き合えない。

本人が笑いながら言つもんだから

少し顔をひきつらせて聞いてみた。

「で、雄輔はなんて?」

なんて言つこともあつたらしい。

「付き合つてる人がいなかつたら是非・・・」

直接雄輔に聞くツワモノもいて

あたしの微妙な顔を見て雄輔は笑う。

「そりや・・・いや、別に・・・」

じどりむどりのあたしに雄輔は「一ヤツ」と笑つて

「じや、部活行くか。」

と、話を変えた。

そう、あたしは自分の好きだったテニスより

雄輔の好きな野球を選んだ。

「よ、マネージャー、今日も頑張ってな！」

先輩たちに声をかけられる。

「はいー。」

笑顔で答えてあたしは今日も

大きなやかんを持つて冷たいお茶を作りに

用務員室へと走つていつた。

「マネージャーの仕事は

思つてたよりずっと地味で

本当に縁の下の力持ち的な存在だった。

ちょっととした繕い物、洗濯、お茶の準備、

後片付け、部室の掃除・・・

みんなの練習を見てるだけじゃなくて  
やるいじめたくさあつた。

「あ 死にやう――――――――」

練習中に休憩の号令がかかると

一斉にお茶配り。

「うめ――――――」

「ココリ笑顔でそういう反応されると

マネージャーとしては

「お代わりあるよ」

つて、サービスしたくなる。

休憩時間はあたし達は大忙しで

終わつたら片付けとお茶作り。

先輩マネージャーのみさと先輩は

笑顔の可愛い2年生。

みさと先輩と一緒にお茶を作りながら

ふーーーと一つため息をついた。

「どうした？疲れた？」

「ココリと笑つてみさと先輩が聞く。

「いいえ。そんなんじゃないんですけどね。」

「ん? もしかして気になる人でもいた?」

うちの野球部、粒ぞろいだから

そうなんです。

3年の部長をはじめとして

## 野球部はイケメンぞろい！

アーティストのイケメンバラエティも真っ黒でか?

田の前でそんな彼らが

必死にボトルを追いかけてるのを見ると

それが雄轉じやなくても

ギンと胸が締め付けられる感じになる

フ、チヤ 素敵なんだもん

一番素敵なのは雄輔だけど

思わず赤くなつたあたしに

みさと先輩は明るく突っ込みを入れた。

「先輩の誰か？1年生から見ると

大人でしょ？思わずクラッと来るよね。

「いや・・・そんなことは・・・」

「んじゃ、え？1年なの？」

「え！あの・・・」

慌てたあたしに、

「あかりちゃん、かわいいねー。

んじゃ、来週までに誰か観察しつくわ

あ、部長はやめた方がいいよ

彼、女癖悪いから。

性格はいいんだけどね。」

・・・・・・・・・・・・・・

そうなの？

向井理によく似た部長に団をやる。

そういう人なんだ・・・・へえ・・・・

重いやかんを運びながら

運動場を眺める。

「ほり、みんな練習終わったみたいよ。

部室ドア開けてくるね！」

力ギを預かっているみさと先輩は

やかんをテーブルに置くと

さつさと次の仕事に取り掛かる。

部長にポンと肩を叩かれた。

みんなの着替えが終わつたこ

「あかつちやん、エ'う・もう慣れた？」

いきなりな部長の出現に

ちゅうとびくつ。

「あ、はいーなんとか。」

ちゅうと緊張して答えるあたしに

部長は柔らかい笑みを浮かべて言った。

「疲れない程度によろしくね。」

「はー。」

あたしの返事に満足そうにうなずくと

ポンポンとあたしの頭に手を置いて

「いい返事だ。じゃ、また明日。」

と、やわやかに去っていった。

大人だあ・・・・・

今まで接したことのない大人な態度に

ちょっと放心状態のあたし。

「何ボケつとしてんの?帰んぞ。」

雄輔の声に慌てて鞄を持つ。

「待つてよー!」

あたしは慌てて雄輔を追いかけた。

「よつ。」

軽く手をあげて声をかけられる。

「あ、こんにちは。」

「また後でな」

「はい。」

「一之」コリ笑顔で答えたあたし。

あたしは、お昼御飯のあと、

同じクラスの友達と一緒に食堂に行つた。

高校生になると学校に自販機があるなんて知らなかつた。

堂々とジューースが飲めるなんて

メッチャ嬉しいんだけど

ところが、今日はまたまたま食堂で

自販機の前に並んでいたら

お面を食べ終えた部長に会つた。

で、わざわざ挨拶。

妙にハイテンションのみんなを連れて  
手に持ったオレンジジュースを飲みながら  
部長の背中を探す。

友達と戯れながら何か話して、

時折笑い転げる。

・・・・部活の時には見ない顔だなあ・・・

珍しいもの見ちゃった・・・

「先輩！」

あたしは部長に呼びかけた。

あたしを振り返つてニコニと笑つ部長。

あれ？

後ろでみんなクラクリよろじますが……？

大丈夫？

「どうかした？」

「いえ、友達が先輩に会いたいと……」

と言いかけた途端

「きやあ～～ 何言ひてんのよあかりーーー！」

と、妙なテンションの声が響く。

「良かつたら、また部活の見学においでよ。」

甘い声ととみけやうな笑顔で言われて

みんながいっせいに頷いた。

・・・・・おいおい・・・

「…………すみません……じゃ、行くよ。」

何だかアイドルにでも会ったような反応のみんなを

そのまま教室に引つ張つて戻る。

「あんなカッコいい部長つているんだね。」

みんなが口をそろえて囁く。

「絶対惚れるよね……」

うんうんと、頷くみんな。

いや……確かにカッコいいけどね。

「部活行くのも楽しいよね……あんな人がいたら。」

「ひりやましぃひりやましぃ

「あ、楽しいけどね。（あたしは別の意味で）」

と、答える。

「あかりも好きなんでしょう？照れなくつていいつて」

みんなが楽しそうに詰め寄る。

好奇心思いつきりむき出しにして。

「そりや嫌いじゃないけどね。」

「じゃ、好きなんじゃない！」

「もうと好きな人はいる」

という絶叫が、廊下の端まで響いた。

何事かとみんながこっちを向く。

「もつ、今日はゼーーーつたい野球部の見学に行くからーーー！」

「で、あかりの好きな人当てようか」

「あ、それ面白そう」

「でもあたしはあの先輩がいいわあ」

そして・・・・

「あかりい」

・・・・・ほんとに見学に来るのは思わなかつたよ・・・・

ギャラリーがいると、オトコって頑張る生き物らしい。

いつもにも増して真剣に練習している。

休憩になるまで、必死でカツカツと見せようと

ミスもいつもより少ない。

・・・・・

まあ、いいことなんだけどね。

こつものようにあたしとみせと先輩は  
大きなやかんにお茶をどつさり作つて  
休憩中に配る。

「もしかしてあの子たち、昼休みの？」

部長が汗を拭きながら

あたしに聞いてきた。

「はい・・・すみません。」

何か申し訳なくて謝ると

「いいよ。みんな頑張つてるし。」

さわやかに笑つて

「御馳走さん。」

と、コップをあたしの手にあるお盆に置いた。

皿の隅にはフーンスの外で

さやあ と、小さく悶えてるみんなが見えた。

・・・・・コップ置いただけだるーが・・・

後半の練習が始まった。

・・・・と、

「 いてつ ! ! ! 」

ボールを追いかけて勢いよく激突する一人が見えた。

ありや ・・・

雄輔と、もう一人、2年生の先輩。

「 行くわよ。 」

みさと先輩の声とともに

氷とタオルを持って運動場に走る。

痛そうな顔した一人に冷たい氷を渡し、

ベンチへと連れていく。

「 意外と、どんなさいことするじやん。 」

あたしの肩に支えられて歩く雄輔に言つてみた。

何と初步的なミスだらう。

人とぶつかるなんてありえないでしょ。普通。

「だよな。おかげでとんだ巻き添え食つちましたぞ。」

2年の原田先輩が雄輔を睨んで言った。

「お前が邪魔など」といふからだや。」

イラッとしたようすに雄輔が言つた。

・・・・・

「雄輔、ちょっとひいぢや。」

険悪な雰囲気になりそうなので

あたしは雄輔を部室へと連れていくことにした。

ま、大したことはないと思つたけど

喧嘩されちゃかなわないし。

部室で、湿布でも貼つて

ちゅうと心もクールダウンしなくちゃね。

「雄輔、先輩に絡むのはやめとせなよ。」

湿布を貼りながらあたしがいつと

「うるせー。」

つて、そっぽ向きながら

雄輔はふてくされた顔をした。

・・・・・何かいつも雄輔と違うなあ・・・

あたしにこんな態度とることなかつたの・・・

「今日の練習はロードワーク。」

いきなり部長が宣言した。

うちの学校は山の中腹にあり、

坂道を上った上にある。

「んな、無茶・無理・・・・・

「ゴール前に坂道なんて死にそうじやん。」

みんなのブーリングもものとさせず

部長は言った。

「優勝者には、マネージャーと一緒にアート

突然の爆弾発言に

みんなががぜん張り切りだす。

「どうして？」

興味津々のみんなの視線を浴びて

あたしとみさと先輩はため息ついた。

「前もやつてたなあ・・・

「ある意味恒例なの。乗つてやつてよな。」

みさと先輩に言われて

「はあ・・・」

と、力なく返事を返す。

「どうのマネージャーがいいかは選ばせてやない。

いこよな、マネージャー

「

みさと先輩の返事にみんながいつせいにスタートラインに並ぶ。

「3キロ先のお寺の門にタツチして帰つてくる」と。

不正がないか、マネージャー、先に行つて来い。

赤マジック持つてな。

「はいはい、んじゃ、あたしがチェックするからね。  
みんな頑張つてね。」

と、みさと先輩は自転車で先に出発した。

あたしはゴールか・・・

しかし・・・何という練習・・・・・

「位置について、用意、ゾーン。」

あたしの命令を仰臥位に一斉に走り始める部員たち。

思わず心の中でつぶやいた。

「一番になつて・・・雄輔。」

あたしはとりあえずお茶の用意をして待つことにした。  
一斉にスタートを切った部員たちを見送り

落ち着かない・・・・・

誰が一番に帰つてくれるのかな・・・・・

普通に考えりや、3年が早いに決まつてゐる。

となると・・・・・

みさと先輩に聞いておけばよかつた。

誰が早いのかつて。

雄輔だつて遅くはない。

いつもマラソン大会は入賞してた。

だから、応援してると・・・頑張れ！

5分たち

10分たち、15分が過ぎた。

運動場から通りを見降ろすと・・・

あ、帰ってきたかも？

ユーフォームが同じだから

何だか見わけが付かないけど・・・

ドキドキしながらスタートした地点に立つ。

帽子が見えてきた。

坂道を駆け上つてくるのは・・・

んん・・・ヒビツチャーやつてる小塚先輩？

あ・・・部長も来た。

6キロ走ってきた割には一人とも

すごいスピードでトップを競っている。

雄輔は？

あつという間にゴールを目指して飛び込んできた一人。

勝者は、タッチの差で小塚先輩だった。

「じゃ、約束通りマネージャー貰つてくれから」

小塚先輩はニヤツと笑つて部長を見た。

「しゃーねーなあ・・・。」「

## 苦笑する部長。

「ところで、今度の十曜でどうなった？」

あたしの前に立ち、二ツコリ笑う小塙先輩。

約束だからね

何時なんばかり(?)

え・・・あの・・・あたし?」

小塚先輩に戸惑いながらも問つあたし。

「ち。ち。」

やつぱりあたしの頭にポンポンと手を置いた。

「触んなー。」

いきなり上がった声に

みんなが一瞬びっくりして田を向ける。

「今どき、そんなバカな話ねーだろ!」

なんで無理やりデートだよ。

んなもん、認めらんねー!」

小塚先輩の手をあたしの頭から払いのけ

雄輔はあたしと小塚先輩の間に立つた。

「1年のくせに部長に逆らうわけ?

ふーーーん。お前、何様のつもり?」

小塚先輩がバカにしたように笑う。

「おい、俊介、お前口けにされてんぞ。

1年がお前の言ひ方となんぞ聞けねーんだと。」

「雄輔、今更なに言つてんだ?

カツコつけてるつもりか?」

「うっせー!」

あ・・・マズイ。雄輔、切れる3秒前・・・

先輩を殴るなんてシャレになんない。

下手したら部活どじろか大変な事になるかも・・・

そう思つたあたしは大声で言つた。

「小塚先輩!――土曜日ですね!」

「じゃ、10時に駅でいいですか？」

「あかり……」

「雄輔……怒らないでよ。」

「んな顔して睨まれても」

「あたしがあんたを助ける方法つて」

「これしか浮ばないんだもん……」

「口惜しそうな雄輔と対照的」

小塚先輩はあたしの声に満面の笑顔。

「えじや、楽しみにしてるわ。」

「あ、次の練習に行くぞー！」

部長の声を合図にみんな運動場へと散っていく。

「あかりちゃん、もしかして雄輔くんと付き合ってんの？」

みさと先輩に聞かれていいえと答えたあたし。

「幼稚園なんです。幼稚園からずっと一緒にで・・・」

「ふーーん。

でも、わっしきのあれって幼稚園って感じじゃないわよね。」

「はい？」

みさと先輩は一いつ口と笑つて

「ま、困つた時は言つて

相談に乗るからね」

つて、あたしの背中をトンと叩いた。

だつたら・・・・今度の土曜日

かわつてくださいよ・・・



部活が済んで、帰り支度を終えて

いつものように雄輔と帰る。

帰り道、何も言わない雄輔に

「何怒つてんのよ。」

つて、恐る恐る聞いてみた。

「バカヤロー！」

たつた一言、雄輔は吐き捨てるよつて言つた。

「なんで絶対嫌つて言わなかつたんだよ。」

「あそこで絶対嫌つて言える?」

「何か野球部の恒例だつて言つてたし。」

だからあきらめて・・つて言われたつけ。

「なんこと知るか！」

思いつきつ不機嫌な顔でそっぽを向く。

「じじめあたしに怒るのって珍しい……

「とにかく、データーへりこ、仕方ないじゃない。

それ以上つて言われたら

そりやあんじこ困るナビ。」

つて、言つたら言つて終わると同時に

「当たり前だろー。」

つて、また怒る。

・・・・雄輔、そんなに怒らないでよ・・・・

「お前、データーへりこつてなあ、

甘過ぎなんだよー。」

何かあつたらビバさんだよ。

しかもあの、小塚だる・・・。」

チッヒ舌打ちしながら雄輔は

イライラを躊躇せずにさすがに怒っている。

雄輔・・・それ考えすぎ。

つてつよつ、こつからそんなに心配症になつた?

「あかりはトロベセーから

気付いた時にまだじつもなくなつてゐる。」

何がだよ・・・・・たぐ・・・・

いつまでもグダグダ言つてゐる雄輔に

あたしもトライしてきました。

「雄輔！やんな」と叫びだつたら

一番にあんたが帰つてくつや良かつたじやん。

そしたら、いつまでもひじり

懶つてゐるゝもなかつたんじよー。

自分が負けたくせにみつともなつてー。

「何だとー。」

「ここ過だと思つたけど

あたしも上まらない。

「雄輔にやんな言つ方される覚えはないわよー。

雄輔！やみんなの空氣読めばー。

「アーテでみんなが頑張るんだつたら

マネージャーとつかや本理よー。」

一瞬、キツと雄輔の目がきつくなる。

・・な・・なによ・・

「オトコを甘く見んなよな。」

雄輔はそれだけ言って

後は何にも言わなかつた。

・・・・・

そして土曜日。

「おまよ。可愛こじさん

「おまよ。可愛いこじさん。

「 もー、いいですよ、お世辞重ねなくて!! 」

「 こやこや。マジで。 」

小塚先輩はいつも制服やコートフォームと違い

ジーンズに綿シャツだった。

おーー、何か雰囲気違つてゐる。

「 じや、とつあんぱいれ。 」

切符を渡されて改札を通る。

表示されていゐる金額を財布から出すといふと

上から手を押されられた。

「 今日はスタートなの。 」

そのくらいいいから。」

「でも……」

「いいから。」

「…………じゃあ……あつがいついります。」

満足そうに笑う小塚先輩。

「「」の前オープンしたでっかい店、

行つてみようかと思うんだ。」

「あ、「」の前みんな言つてたやつでしょ。」

「行きたかったんだ！」

「そりやよかつた。」

電車に揺られながらあたしはウキウキ。

可愛い文房具も、おしゃれなカフフもあるらしい。

あ・・・でも先輩はイヤかな。

その時はちょっと別行動つてことで

「あ、降りる駅だ。」

先輩が立ち上がった。

あたしも席から立ち上がった。

さりげなく手を引かれて少し混んだ電車を降りる。

げ・・・・この手は何？

「はぐれるといけないからね。」

たくさんの人波に流されるように進みながら

小塚先輩は不審げなあたしにそう言った。

新しいお店は思った通り

目移りしそうなものがたくさんあった。

それに美味しそうなのも山ほどつら

ドーナツやパンをいくつか買った。

可愛いメモ帳も買った。

綺麗な色の消しゴムも。

普段使ひづらちななものでも

新しくお気に入りが増えるのは嬉しい。

「あ・・・いろんな種類があるんだ・・・」

「寄つてこようか。」

30種類もあるソフトクリーム屋さんを見つけ、

小塚先輩と一緒にソフトクリームで  
ちょっと休憩。

あたしはチョコにブルーベリー。

小塚先輩は桃とヨーグルト。

こんなソフトクリームは初めて見たよ・・・

2種類のクリームがミックスされているので

色也も綺麗。

今度みんなにも教えてあげよ!と。

・・・と、突然のことだった。

「それ、味見させてよ。」

そういうと、あたしの手をキュッと掴んで

あたしのソフトクリームをペロリ。

え・・・・・！

「オレのもじり~。」

「コラ」と笑つてあたしに差し出すナビ

「・・・・いこです・・・・」

思いつきり動搖して答えるあたし。

「遠慮しなくていいのに」

楽しそうな先輩の声に

『遠慮なんてしないですって・・・・』

と、心の中で突っ込んだ。

食べかけのソフトクリーム・・・・

これ、このまま食べてもいいかな・・・・

でも、それって・・・・間接キスとか？

「……………

まさか田の前で捨てるとか出来ないし……………

……………

そんなあたしありお迷いを見た先輩は

「そんなに悩むことないだろ……………

友達と分けつことかしない？

ほら早く食べないと溶けちまうぜ。」

……………意識しそうないこと？

……………

ソフトクリームはいつしかツーーーと溶け始めて

あたしは慌てて舌でそれを受け止めた。



慌てながらソフトクリームを食べるあたしを

小塚先輩は面白そうに見ていた。

そして、

「また来週もデートしない?」

なんて真面目な顔して言った。

「それは出来ません。」

即答するあたしに小塚先輩は苦笑い。

「えりく返事早いね。」

「これでも、オレ、結構もてる方なんだけどな。」

それはそうだらう。

「び」となく嵐の「阿くくん」似た小塚先輩。

もてそうな感じします。

あたしも好きか嫌いかつて聞かれたら  
チームメイトと「う」と差っぴいても  
好きに分類されるかもしれない。

「じゃ、また部長に『褒美賞』つか

ニコッと笑つて、本気か冗談か

そんなことを言つた。

夕方までショッピングしたり、

ゲームセンタに行つたり、『飯食べたりして

結構楽しく時間を過いした。

気が付けばもう6時になつていた。

「もうもう帰るつか。」

「はい。」

最寄りの駅まで送つてもらつて

「じゃ、いいでしょ。」

と、家まで送るといつ先輩を断つた。

はあ・・・一応義務は果たしたよ・・・

と思った時、

！-----！

「じゃ、また学校でな。」

と、改札で二ヶ「コ」微笑んで

ホームへと消えていく先輩。

一瞬何が起つたのか分からなかつたけど

ほつぺたに柔らかい感触と

肩に熱い手を感じて固つた。

・・・・・・・・

見事な去り際 ・・・・・

しかしなんて早業だらつ ・・・

翌日、部活に行くと

みさと先輩が興味津々で話しかけてきた。

「土曜日、どうだった?」

顔に二コ一コワクワクを一杯に張り付けて

あたしの答えを待つみさと先輩。

「え? いや別に・・・何も・・・」

ドキッとしながらもそう答えると

「あの小塚先輩に限つて何もないなんて

そんなバカな事はないでしょ」

???

はてなマークだらけの顔をしたあたしに

「知らなかつたの?」

小塚先輩って手が早いので有名なんだか。」

そつなの?

そうだったの?

だったらあの早業も納得……

「その顔はやつぱり何かあつたでしょ?」

「なになに?」

あかりちゃんが小塚の手に落ちたって?」

「うそ……マジで?」

近くで聞いていた先輩たちも

何か知らないうちに話に入ってきたし……

しかもどんどん変な話になつてゐるし。

「違いますよー何にもないってばー！」

健全な『トー』トですー！」

真つ赤な顔して怒つて言つあたしに

後ろから突然意外な言葉が飛んできた。

「そんなに怒つてゐつてこりつ」とは

不健全な『トー』トがしたかつたつてー」とへ

それならわつと書つてくれたりよかつたのー」

・・・・・何をやつしやるわざやれど・・・・・

いや、小塚先輩・・・・・

「とこりつとで、部長、もう一回、褒美くれよ。」

「とにかく言つ小塙先輩に部長の信じられない一言。

「だったら、今日もローワーク行くか

マネージャーもこよな。」

あたしに部長が言つ。

「・・・出来れば勘弁してほしいです。」

あたしの答えに

「何言つてさの。

マネージャーってみんなのアイドルなんだぜ。

すんげー褒美らしくつて

やねえよな みんなー！」

「ねーーー！」

盛り上がるみんなにあたしは何も言えなくなつた。

そんなもんなのか？

イケメンやるいなのにマネージャーが少ないのは  
オーディションもあつたけど

こんな感じにも原因があつたのか・・・

「そんなんおかしいだろ！」

嫌がつてんじゃねーか！」

突然、つかつかと雄輔は部長の前に出ると

大声で言い放つた。

「へえ、雄輔、お前何カツ『つけてんの？

それともマネージャーが好きとか？」

「そんなんじゃねーけど、

マネージャーは景品じゃねーだろー！」

「いいじゃねーか、みんな頑張んなら。」

「よくねーよ。」

睨みあう雄輔と部長。

嬉しいけど、そんなことして大丈夫?

先輩にこれから先、目つけられるよ?

「雄輔、やめなよ。」

「ウルセ。お前は何で平氣なんだよー。」

雄輔が壊れそり・・・

マズイな・・・

「そんなに言つなんぢ、

お前が一番で帰つてくつやいいじやねーか。

そしたら誰も文句は言えねーぞ。

もうひるん、そんなこと俺がさせねーけどよ。

それに、『テートの続きをしたいしな』

小塚先輩が挑発的に雄輔に言つた。

「おもしれーじやねーか。

よつしや、ゼットー 一番で歸つてくるから。

まゝ、わざと叩き掛けられた。」

単純といふか、乗りやすいといふか・・・

部長は一ヤツと笑つて

「わいわい遊べー。」

とみんなに号令をかけた。

みさと先輩の声に、一斉にスタートを切る。

# ロードワーク嫌いな雄輔が

真面目に走ってるよ・・・・

「雄輔くん、カツコいいじやん。」

みさと先輩がニシと笑つてあたしに言った。

「愛されてんねえ

ゴールしつかり見ててよ。」

そういう言い残すと、折り返し地点のチェックへと

自転車を走らせて行つた。

いくりなんでも

3年生に勝てるわけないじやん。

雄輔、体力の差を甘く見てんじやないよ・・・

でも、

正直、嬉しかつた。

これで一番でほんとに帰つてきたり

もつと嬉しいけど・・・

ま、無理だよね  
・・・・・

じつと待つこと20分。

遠くに人影が見えてきた。

・・・・・

あら・・・また一番は小塚先輩・・・

やつぱりね。

だから雄輔、体力的に無理だつてば・・・

気持ちは嬉しかつたけどね・・・

なんて思つてたら・・・

小塚先輩のすぐ後ろから

雄輔が戻ってきた。

うそ・・・

『オレはやるとさややるんだよ。』

笑いながらいつか言った雄輔の言葉を思い出す。

ほんとだ・・・

「結構しつこいな。」

「うむせーみ、お前になんか負けるか。」

「先輩にお前呼ばわりたあ生意氣だ！――！」

走りながら一人が絡み合つた。

え？ 小塚先輩、足引っ掛けてる？

雄輔、先輩叩いてる？

あれ？ あれ？ と見てる間に

一人は道の真ん中でもつれあって

殴り合いを始めた。

ちよつと……

ゴール間近にして、

あの人たちは何をやつてるんでしょうか。

「あほー！早く起きてゴールしねーか！」

部長がその横を颯爽と走る去つていきながら  
一人に叫んだ。

はつとして起き上がる二人。

その間に、余裕かまして部長はゴールした。

・・・・・・・・・・

あほ  
・  
・  
・  
・

結局今回のトップは部長だった。

「お前らバカだろ。」

部長に言われて

「『ライツと一緒にすんなー。』」

と二人してハモる雄輔と小塚先輩。

・・・・・・・・

「とにかく今回は俺が一番とこいつことで・・・」

一ヶと笑つてあたしとみさと先輩を見る部長。

「で、あたしと土曜日ゴルフデートね。

久しぶりだなあ ねえ?俊介」

みさと先輩が一ヶ「コリ笑顔で言った。

え？

みんなが同じ気持ちで部長とみさと先輩を見た。

「おこ・・・何言つて・・・」

「今の時代、逆指名も有りだかんね。

今回の「」褒美は先輩マネージャーのあたしが

逆指名つてことだ。」

そう言つてみさと先輩はあたしにウインク。

「しゃあねーなあ・・・」

と言つて、何か知らないけど

あたしは今回お役御免ということです・・・

「やういや、あの一人つて前に付きましたけ・・・」

誰かがぼやつと書いた言葉に

みんながひそひそと囁めだす。

「え? じゅ、マジ? ト? ?

「土曜日だつてや。」

「見に行こうか

「面白そー。」

つて盛り上がつてゐる横で

「雄輔・・・あんたゴール前で何やつてたの?」

つて、雄輔の隣に座つてそつと聞いた。

「アイツが足引つ掛けてきたから、  
そんな汚い真似にはお返しを……と

ぶん殴つてやつた。

そしたら殴り返してやがつて……」

「ほんと、バカだわ。」

呆れたあたしが言つと、

「誰のためだと思つてんた!」

「誰のため?」

「……ウルセ。」

分かつてたよ。

あたしのために頑張つてくれたんだよね。

ま、救つてくれたのはみさと先輩だつたけどね。

かや そひの元町 とかなれや。

「みやと先輩、ありがとうございました。」

みんながグラウンドに散った後、

あたしはお礼を言つに行つた。

「いいの、いいの。

つていうか、あたしも嬉しいし

「え？」

「」

「」

「せつときみんな言つてたでしょ？」

あたし、俊介と付き合つたんだ。」

・・・・・・・・・・

「小塚先輩もだけど、俊介も結構

ノリで女の子とチャラチャラすんの好きだし

ああいつの付き合いつと

彼女としてはしんどいわけ。

で、別れちゃった。

でもね・・・実はまだ好きだったりすんのよね。」

初めて知ったよ・・・

・・・・・・・・・

「あかりちゃんは、雄輔くんでしょ？

あの小塚先輩に落ちなかつたんだから

よっぽど好きな人がいるんだよねって

みんなで噂してたんだ。」

「え・・・あの・・・」

いきなりな発言に困惑したあたしに  
みさと先輩はくすつと笑った。

「あんなに一生懸命になつてくれて

嬉しくないわけないじゃん。

「ひひやましこなあ。

で、ひょっと意地悪しちゃつた

え？

「俊介は、小塚先輩で落ちなかつたあかりちゃんを

プライド掛けて落そうと

企むようなヤツなのよね。

落ちた女の子にはかわいそうだけど

ま、後は続かない。

お氣の毒なんだよね・・・

ま、そんなアイツに惚れたあたしが

一番かわいそうかも知んないけどね。」

寂しそうに笑うみさと先輩は

なんだかあたしよりずっと大人の顔してた。

「ま、雄輔くんなら俊介みたいな」とは

なさそうだし、頑張つてね。」

明るく言われて、思わずはーと返事すると

「やつぱりそうなんだあ。」

つて、一ヶ口リ満面の笑み。

「え いつから?

もしかしてもう付き合つてるの?

デートとかした?

もしかしてその先も?」

いえいえ・・・

タジタジ・・・となるくらいの勢いで

質問の嵐。

「で、何か困ったことがあつたら

何でも相談してね」

と、みさと先輩は

あたしの肩をポンと叩いて言った。

なぜかその場のノリで、

野球部一同、土曜日の極秘指令が一気に発令された。

『部長とマネージャーのデートを見届けよ。』

もじりん彼らには内緒で。

欠席は必ず小塚先輩に報告すべしと・・・

これも部活なのか？

あたしは、みさと先輩に言つわけにもいかず

雄輔に愚痴つてみた。

「デートの覗き？」

んな悪趣味な・・・

雄輔もやつと思ひでしょ。」

「…………」

雄輔は何も言わない。

「みんなそんなことに興味あんのかな。

へんなの……」

みせと先輩の気持ちを聞いたからやつたあたしは  
部長とのトークは楽しんで欲しくなつて思ひ。

なのに面白がついてくなんて……

「ま、ばれずに最後までついてくなんて

不可能だらうけどね。」

「んな」とねーだろ。」

初めて雄輔が答える。

「だつてあれだけの人数がうるさいからしたら

絶対ばれるつて。」

「じゃ、お前も気付いてたのか？」

・・・・・・・・・・

今・・・雄輔、怖い」と言いました?

あたしが?

何に気付いてたつて?

! ! !

「もしかしてみんな見てたの?」

「あたり。」

・・・・・・・・・・

雄輔が最近イラついてるのも

口数が減つたのも

もしかして見てたから?

小塚先輩、結構接近してたよね・・・

あれをみんなに見られてた?

ウソ・・・・

そこではっと気付く。

『あの小塚先輩に落ちなかつたんだから

よっぽど好きな人がいるんだよなって

みんなで噂してたんだ。』

みさと先輩は確かにそう言つた。

みんなで噂してるってことだよね。

みんなが知つてるってことだよね。



部長とマネージャーのトークの口上

なぜか学校に一旦みんな集合して

小塚先輩の指示を聞く。

「お前たちは電車で行け。

隣の車両から田を離すな。

駅に着いたら降りたのを確認して

どこで降りたかオレのケータイに連絡しろ。

オッケー?」

「ラジヤー」

「んで、後の奴らは一本後の電車で行くぞ。」

「了解!」

着々と進んで行く追跡劇に

あたしは思わず雄輔に聞いてしまつた。

「ねえ、この前の時もこんな感じだつたの?..?」

「ああ。つづーか、これ、恒例らしげ。

もしかして知らなかつた?」

「うん。」

知らなによ・・そんなこと。

「でも、少なくとも小塚は知つてたぞ。

分かつててあそこまでやるんだからすげーよな・・・

ボソッと言つた雄輔があたしを見て言つた。

「当然部長も知つてるよね。」

「だらうな。だから多分、必死で巻くぞ。」

「小塚先輩は・・・」

「巻くとかそんなことしなかつたけど・・・」

「思い出してもそういうふうがぶりはなかつた。」

「だらうな。」

「公認であかりを落とすつもりだつたんだな。」

「うや・・・・・」

「ま、失敗に終わつてよかつたけどな。」

「そーだね・・・・・」

「なんて言つてゐるやうに

みんなで移動開始。

あたしも慌ててみんなについて行つた。



小塚先輩は慣れた様子で

ケータイでの連絡を受けながら

楽しそうにデータの追跡をしていた。

『小塚さん、二人は海岸沿いに

散歩に行くみたいです！』

報告を受けた小塚さんは

それを聞くとみんなに言った。

「海行くぞ。」

海なら人が多くて見つかりにくい。

「3人以上にはなるな。目立つ。いいな。」

「オッケー」

「じゃ、オレマネージャーと行こうかな」

「あ、オレも！」

「待てよオレも！」

・・・・・3人までとおっしゃいましたよね・・・確かに。

勢いにおびえて一步下がると、

「マネージャーは初めてだからオレが連れてく。

いいよな。」

と、小塚先輩が側に来た。

「冗談じやねー。」

お前みたいなヤツに任せられないかよ。」

と、雄輔が小塚先輩の前に立つ。

「オレと張り合おうなんていい度胸だな。」

「1日かかつて落とせなかつたくせに

偉そうな口きいてんじやねーよ。」

・・・・・・・・・

この一入・・・

やつぱりどことなく似てるわ・・・

そいつ言つたら一入して違つと声をそろえて言ひだらつたど。

「ほら、早く行かないと！」

雄輔も、先輩も行きますよ！」

あたしはその場の凍つた空氣を抹殺すべく

そいつ言つて歩き始めた。

みんなもほつとして海を指す。

程なくついた海は、どこもかしこも人・・・

なのに目指す一人はすぐに見つかった。

二人仲良く並んで木の影に座っている。

「ふーーん、なかなかいい雰囲気じゃん。」

「そりや元恋人同士だかんな。」

「もしかして良いもん見れるとか?」

「何期待してんだよ、ボケ!」

いろんな声を聞きながら

あたしもこつして見られてたのか……と

改めて愕然とする。

「先輩……」

隣を歩いていた小塚先輩に確かめたくなつた。

「なに?」

「」の前の時も「」やつてると知っていたんですね。」

「ああ。知つてたよ。」

「だつたらなぜ・・・」

「巻かなかつたつて?そりや・・・」

小塚先輩はニヤツと笑つて

「オレのモンつてみんなに知らせたかつたからね。」

とのたまつた。

「誰がお前のもんだと!-?」

あたしが言つより早く反対側から突つ込みが入つた。

「話に割り込んでくんない！」

「黙つてられつかよ！」

一  
何  
?  
!

あたしを挟んで喧嘩するのはやめて欲しいぞ・・・

「「「「」」」」

突然、近くから声が上がった。

はつとしへそつちを一齊に見る。

あ  
・  
・  
・  
・  
・

## みんなの視線に先には

この暑い天氣にも負けないくらいの

アツ～～～い口づけを交わす

部長とみさと先輩がいた。

「ハサウエイ」

思わず田をそらして顔を覆つたあたし。

離れてるからとほいえ

何してゐかばつちり見えて・・・・

恥ずかしきる・・・・

「ウルフ君、おめでた。」

みんなは田をそらすかじかと見てゐてる。

あたしはどうすればいいのよ・・・・

一人ドキマギしてゐあたしの手を

雄輔がグイッと引つ張つた。

「え？」

思わず雄輔の顔を見上げる。

「やつてらんねー。

何が楽しくて人のラブシーン見てんだか。

オレ、帰るわ。行くぞ。」

みんながあつけに取られてる中を

雄輔はあたしの手を引き

ずんずん歩き始めた。

「おい！待てよー。」

小塚先輩の声に雄輔が振りかえる。

「あんたもこんなバカなことしちゃねーで  
もひひゅうとましな遊び方しちゃよ。じゃあな。」

雄輔の捨て台詞にみんなが固まる。

・・・・・もひひゅうとましな遊び方しちゃいひ・・・

「雄輔、先輩とあんまりもめない方がいいよ。」

雄輔と歩きながらちよつと忠告してみる。

ややこしい事になるとイヤだもん。

「大丈夫。心配すんな。」

「でも……」

「んな」とグジグジ言つよつなヤツは

ぶん殴つてやるから。」

・・・・・そんなことしたら停学とか部活停止とか

余計ややこしくなるんじゃないかな?

ちつたあ考えよつよ。

「腹減つたあ、なんか食いにいこーゲ。」

いきなり雄輔はニッコリ笑つて話を変えた。

その笑顔、予想してなかつた分

心臓に悪すぎます。

しかも・・・・・

気が付けば、さつき引っ張られたまま

雄輔はあたしの手をしっかりと握つていた。

マズイ・・・・顔が赤くなる・・・・

「ハンバーガーでいいよな？」

「うん。」

なぜか照れながら答えるあたしに

雄輔は不思議そうな顔をした。

「ん? ハンバーガーって嫌いだった?

んなことねーよなあ？」

嫌いじゃなによ。

嫌いじゃなにかど

今は思春期がそれどいいふじやないんだよー

「のせ・・・あたしがどいすればいいんでしょつか・・・

出来たりのまま繋いでたこ・・・

ちゅうとひつむこ

あたしは歩いた。

「部長たち、どうなったかな・・・?」

まだみんな追いかけてんのかな。」

「多分な。」

「「の前も雄輔、先に帰ったの?」

「いや・・・最後までいた。」

やつぱりせつべのチコッは見てたわけだ……

恥ずかし……

出来ぬ」となりみんなの記憶から消しおりたい……

「あんなヤツに近寄りせよな。ボケ！」

雄輔のつぶやきに思わず噴き出した。

「じゃ、誰だつたらっこいの？」

笑いながら言つた言葉に即答で帰つてきたのは

「オレ。」

だった。

あまりに簡単な

あまりに直球すぎる雄輔の答え。

あれからあたしの頭の中には

雄輔の一言がリフレインしている。

「あんなヤツに近寄らせんな。ボケ！」  
「じゃ、誰だつたらいいの？」

「オレ。」

そんなこと言われた

あたしはどうしたらいいんだろ？

それって、それって、

どう解釈するといいの？

あのセリフの後の雄輔はいたつて普通で  
でつかい口あけて

美味しそうにハンバーガー食べてた。

食べつぱりの良さは昔からだけど・・・

あたしはあたしで、

大好きなチーズバーガーを

これまた大口開けて食べてたけど。

なんせ、相手が雄輔だと

今更取り繕つてもしょうがないってのもあるし・・・

変におちよぼ口でなんか食べてたら

雄輔、絶対笑う。

「なにお上品ぶつてんだよ！」

似合わねー

とかつてからかうにきまつてゐる。

「ねえ、月曜から部活行きへへない?」

捨て台詞吐いて抜けてきたんだから

それなりに先輩からなんか言われんじゃないか?

つて心配してゐるあたしに雄輔は言つた。

「んな、お遊びに付き合わねーへりこで

グヂグヂ言つよつた先輩なさ

オレがぶちのめしてやる。」

ニヤッと笑つて言つた雄輔は

中学時代のやんちゃな顔をしていた。

「ほりあ・・・またそんなこと言つて」

つまらないトラブルには

巻き込まれるだけ損だつて知つてんでしょー。」

それで散々嫌な思いもしたくせに。

「じゃ、オレが暴走しそうになつたら

あかりが止めりやいいじゃん。」

「あたしが雄輔をじりせりつて止めるのよー。」

あんた怒ると、押さえ効かないじゃん。」

人の言つことなんか聞きやしないからねえ。

雄輔は。

「抱きついたら止まるかもよ。」

・・・・・・・・・・

あっけに取られるあたしを見て笑う雄輔。

「冗談じゃない。」

そんなことできるかあ！――！

つて思つてたのに・・・・・

次の月曜日。

「ほら！遅れんなよおー！」

部長と小塚先輩はきりつとした顔で

練習をスタートさせた。

土曜日のことなんてこれっぽっちも

頭にないみたい。

無事いつも通りの練習が始まつてホッとした。

「先輩、もしかしてより戻しました？」

みさと先輩と二人きりになつた時

あたしは聞いてみた。

「え　　？そんなことないけど。

俊介も別に何も言わなかつたし。」

「うん・・・

何も言わずに」の前のあの

みんなをくわ付けにしたキスは

何だつたの？

あたしのびついた顔を見て

みさと先輩はクスクス笑つた。

「えー？今ビキニのくびり普通でしょ？

「違うと思こますけど・・・」

「もしかしてあかりちゃん、まだ？」

「誰とするんですか・・・そんなこと

思いいつきつい照れながらも否定する。

「誰とつて・・・もしかして雄輔くんと

まだ何にもないの?」

「ないですケド・・・」

何・・・

無い方がおかしいともいいたそうな視線・・・

今どきってそうなの?

ウソだ。誰かウソだと言ひてよ。

その頃・・・

「なあ、雄輔、土曜日あの後どこ行ったんだ?」

「え？ イヤ別に・・・・飯食つて帰つたけど？」

「またまたあ

マネージャーの手しつかり握つて

「どこにもいかねーなんてありえねーっつーの。」

ニヤニヤしながら

いいなあつて顔して雄輔を囲むやつらが3人。

「練習中だろ。」

「そう言わずに教えるよ。」

「何もねーっつってんだろ!!!!!!」

イラッとした雄輔が思わず怒鳴る。

その声は運動場に響き渡った。



「 ひ、何騒いでんだ? 」

キャッチボールをしていた部長が

雄輔たちのところへやつてきた。

「 何もないっす。 」

平然と言い放つてキャッチボールをしようとした雄輔に

2年の先輩がまた絡む。

「 んな隠すことねーだろ? 」

あんだけ派手に見せつけといて

何もねーわけねーだろ。 」

ニヤニヤした顔に向かつて雄輔は

いきなりボールを投げつけた。

「あぶねーだるー。」

「あぶねーのはお前の頭だるー。」

一触即発の空氣をぶち破ったのは

部長だった。

「お前ら頭冷やして来い！」

「ウン——ング3周ー！」

ああいつといふが、けじめがついて

部長はカッコいいと思つ。

ふと隣を見ると、みわと先輩が珍しく

部長に見とれていた。

渋々ランニングを始めた雄輔たちに

みんなが興味津々で目を向ける。

「あんなに怒るわけ」とは

やつぱは図星か?」

「ちょっと閉めて吐かせるか?」

「いやあ・・・アイツは口割らねーな。」

勝手な事を言つて居る部員に

「お前らも走りたいか?」

と部長が氣味悪いくらいの笑顔を見せた。

やつと落ち着いたらしく運動場にほつとしたあたしに

「で。あかりちゃんの方は?」

王子様にさりわれた後、何してたの?」

つて、一ヶ口で聞いてきた。

何してたって・・・

「一人で大口開けてハンバーガー食べてました。」

「それから？」

「もちろん家に帰りましたけど？」

「途中でどこか寄らなかつたの？」

「はい。」

「せつかく一人だつたのに？」

「・・・・・・・・・・」

「だつて・・・雄輔が帰ろうつて言つたから・・・

用事もなかつたし。」

あたしの答えにみさと先輩は

くすつと笑つて

「普通は用事がないから帰らないんじやない？」

つて聞け。

そつかなあ・・・そつかもしれない。

でもドードジやなかつたし・・・

なんて思つてたら何かがフヨンスにぶつかつたような  
大きな音がした。

びっくりして音がした方を見ると

走ってたはずの雄輔と先輩たちが

フェンス際で睨みあつてる。

わざの音は

雄輔の背中がフェンスにぶち当たつた音らしい。

雄輔をフェンスに押し当てるのは

2年の福井先輩。

綺麗な顔してるけどちょっと性格悪い福井さんは

何かと雄輔をからかうようなことを言つていた。

「ちょっとあんたたち、何やつてんのよー。」

みさと先輩が走りながら声をかける。

それには答えず、福井先輩は

雄輔を睨みつけていた。

「謝れよ。」

「お前がわりいんだよ。謝るのはちがうだらう。」

意外と冷静に受け答える雄輔。

でもその田が・・・怒つてゐるよ・・・

「生意氣なんだよ。」

「一年のくせじてー。」

「ちよつと福井君、手離したら?。」

みわと先輩の言葉にもまのつかつ耳を貸せない。

「いっ加減離せ。」

雄輔が低い声で囁つ。

「お前が謝つたらな。」

「いいから離せつってんだろー！」

そう言つた瞬間、雄輔の腕が福井先輩の腕を叩き落とした。

「いつてえ・・・」のヤロ　！　！　！

福井先輩が雄輔の顔めがけて

拳を突き出した。

綺麗にヒットしたパンチに、雄輔がよろめく。

「殴り返してみろよ。お前のマネージャー、

見てるからいいカツコシマーンだろー！」

挑発するよつに雄輔をあおる福井先輩。

あんたねえ・・・・

雄輔じゃなくつても怒るつて。その言い方。

でも、ここは、マネージャーとしては

喧嘩を黙つて見ておくわけにいかない。

怪我でもされちゃ大変だし、

「おお」とになつたらそれこそみんなが迷惑する。

「雄輔！ダメ！」

殴りかかる態勢を取り始めた雄輔に

思わず声をかけた。

そして、雄輔と福井先輩の間に強引に割り込み

両手を広げて雄輔を止めようとした。

「福井君もそこまでにしきなつて。」

みさと先輩も止めに入る。

「「モニ、のけ！」」

あたし達の頭の上で一人の声がハモる。

お願ひだからこんな感じで喧嘩しないでよ・・・

まさかこんな所で

実現するとは思わなかつたな・・・

ただただ夢中で

「雄輔！落ち着いて～～～！」

つて、ギュッとしがみついた。

あたし達、昔からよくじやれあつてたから

あんまり深い意味もないんだけど。

「おい・・・」

呆れたような雄輔の声が頭の上から降つてくる。

し んと静まり返つたグラウンドに気付いたのは

たつぱり30秒は経つてからのこと。

「へーーえ、おとなしそうな顔して

「うん。」

ちょっと動揺を隠しきれない福井先輩は

顔が引きつてる。

「もういいから。」

雄輔が落ち着いた声で言った。

「は？」

「は？ じゃねーつて。

そう言われて改めて周りを見ると・・・

「ゲエ！！！」

思いつたり変な声をあげて

あたしは雄輔から飛びのいた。

「なんつー色氣のねー声出すんだよ。」

雄輔が苦笑してゐる。

それどーじやないよ・・・

みんなが見てるじゃん・・・

変な意味で注目集められやつた・・・

「んもう あかつちやんつてば

そういうことは一人つきりの時まで待つてよね

みさと先輩が固まつたその場の空氣を

わざと降り扱つようじやうと書つて

「せりー早く練習ー。」

つて、みんなを練習に追いやつた。



「やつぱつ仲っこよね~」

みさと先輩がひらやましやつて言った。

麦茶のコップを洗いながら

れいの騒動が収まつてホッと一息。

「あたしは公衆の面前で

あやじめで密着出来ないわあ

」「と笑つて言つみさと先輩に

心の中で『よく言つみ・・・』

と一人突つ込み。

あたしは公衆の面前で外国人ばりのチューは

出来ませんって・・・

面前でなくともした」と無いけど。

「でも、あれでみんなびっくりして怒ってるどいじるじやなくなつたし、よくもつたよ。えらいえらい。」

「そんなに偉くないですけど・・・。」

なんていいつつ、真っ赤になつて照れてしまつた感じ。

今更ながら、恥ずかしいことやつちやつたよな・・・。

「喧嘩の後始末はちやんとしてもりひかりな。」

部長の宣言によつ、

居残り練習と片付けを仰せつかつた雄輔と

福井先輩たちの下校時間は

みんなに遅れること30分。

部長は知らないだろうけど

一番最後の後片付けって

あたしがしてんのよね・・・

彼らが帰らないとあたしも帰れない。

一人眺めてる。

薄暗くなりかけた校庭でトンボをかけてる雄輔を

気付かなかつたけど

遅しくなつてた。

男の子ってあんなに体が硬いんだ・・・

ふと筋肉質の体の感触を思い出してまた赤面。

「や、部屋のゴミ捨てでもしてりや。」

あたしはみんなが帰ってしまった部屋に  
ゴミ箱を取りに行つた。

ガラッ。

ドアを開けた瞬間・・・・・

誰もいないと思つてたのに

部長とみやと先輩がいた。

しかも・・・・・

こんな至近距離で見てしまつたよ・・・

この前にも増して情熱的なキスシーン・・・



「あ・・・」めんなさい…」

慌ててドアを閉めて後ろを向く。

あーびっくりした。

顔も熱い。

きつと真つ赤になってるだらけ。

胸もドキドキして収まらない。

「何やつてんだ?

一人で真つ赤な顔して。

熱でもあんのか?」

トンボを片付けて雄輔がやつてきた。

「ダメツー！」

部室に入ろうとした雄輔を

必死に押しつぶめるあたし。

「なんで？」

「何でも…」

「悪かつたな。もう入つていいぞ。」

部長が出てきた。

後ろからみさと先輩も出てくる。

あたしと、部長たちを見ていた雄輔は

「へえー」

つて、一言言つて、

一人納得した顔して部室に入った。

「じゃ、あたし達は先に帰るから。

「締りよろしくね。」

みさと先輩に声をかけられて

「はい。」

と、顔を見られずに答える。

先輩たちの背中が見えなくなつても

雄輔は部室から出てこない。

何やつてんだろ・・・

「雄輔？」

外から呼びかけてみる。

返事がない。

「ちよつとおー。」

返事がない。

・・・・・

探し物でもしてゐるのかな・・・

あたしは部屋のドアを開けた。

そつと部屋のドアを開けると

部屋の真ん中に置いてある

ベンチプレスに雄輔が寝つ転がっている。

別に筋トレしてるわけでもなく。

「何してんの？早く帰れ！」

「ああ・・・」

生返事を返す雄輔は

一向に起き上がる気配がない。

びついたんだね！」

「せひ、起きてよ。」

雄輔の手を引つ張つて起り立つ雄輔

いきなりむくつと起き上がりて

逆に手を掴まれた。

「ちゅうじこここや。

「ちよつと座つて。」

隣に座りなれてちよつと緊張するあたし。

「な・・なに?」

「あかりはオレに触つても平氣なわけ?」

えらく深刻な顔してると思つたら

そんなこと?

「オレは・・・・・・平氣じやねーけど。」

答えを待つ雄輔はあえて視線を合わせない。

「 もう もは無いで ・・・ せり 雄輔は喧嘩つ 早こし。

先輩殴つたりしたら大変でしょ、だから・・・」

「思いつきつ抱きつくながへ?」

「いや・・・だからその成り行きで・・・」

何だか変な空氣なんですか?」

「じや、成り行きつてことで・・・」

雄輔の腕があたしの肩にまわり  
あつといつ間に引き寄せられた。

なによ・・・こんな」と今まで

一度だつて無かつたの。『

「んなのいや!」

唇が奪われるって表現は

あたしだって聞いたことがある。

でも・・・

勝手に奪わないで頂戴！

あたしの手は盛大に音を立てて

雄輔の頬をひっぱたいた。

バカ・・・バカ・・・雄輔のバカ！

あたしは一人薄暗くなつた道を帰りながら

悲しくて仕方なかつた。

女の子たるもの、

ファーストキスに夢を見ることくらい

想像つかないんだろうか。

あんなのがファーストキスなんて

悲しすぎるでしょ・・・

相手は大好きな雄輔だけど

ほんとはちゃんと心を通わせて

ちゃんと田を見て、

優しい言葉の一つもかけられて

それで、甘い時間を共有したかった。

なのに・・・

思い出しても悔しくて

成り行きだなんてサイテーな事言われ

雄輔にとっちゃ、大した意味もない

そんな行為だつたんだろうか。

それからあたしは雄輔の顔が

まともに見られなくなつた。

といふか見たくなくなつた。

好きな人に裏切られた気分というのは

なんとも言えず複雑で

裏切られたといつても

あたしの中では受け止めるだけで

雄輔にとつねや“なりゆき”なんだけど。

「あかりちゃん、どうしたの？」

雄輔くんとけんかでもした？」

みかと先輩に言われて、

思わず胸の内を漏らした。

「あかりちゃんって可愛いね」

みかと先輩は一ヶ口笑つてあたしを見た。

「どうですか？」

不思議そつに聞くあたしに先輩は言った。

「だつて、恋愛に夢見てて

それを大事にして・・・・・・

擦れてないつていうか、初々しいつていうか

」

初心者つてことですか・・・・?

ま、そらなんだけど。

先輩は真顔に戻ると

必死にボールを追う部員たちを見ながら

あたしに言った。

「相手も同じ年なんだからね。

王子様役を求めるのは、ちと酷じやない?

俊介もそつだつたけど、

結構いっぱいいっぱいみたいだよ。

恋する男の子もね。」

・・・・・

練習が終わつたら

あたし、雄輔に謝ひつ。

そしてちやんと、

どうして怒つたかを云えよ。

そんな話を真面目にするのって

とっても照れくさこねど

このままだとどうしても普通に接するなんて

無理に決まつて。

今日だつて、朝も雄輔とは

全く顔を合わさなかつた。

ずっと一緒に通つてきたあたし達には

今まで無かつたこと。

「ちやんと話します。

みやと先輩見たいにはなれないかもしないけど。

他意は無く少しつぶつてしまつて

次の瞬間赤面。

「あら、心が通じたらすぐになれるわよ」

わざなく笑顔で恐ろしいことをいつみやと先輩。

あたしと雄輔が？

あの日の部屋での部長とみやと先輩が

フリッシュバックした。

・・・・・

想像しただけで顔が熱い。

無理ですって。あたしには。

一人照れてるあたしを面白そうに  
みさと先輩は見ていた。

「あ、あかり、ちょっと話があんだけ。」

部活がすんだ途端

あたしは雄輔に声をかけられた。

「あ、あたしも話があつたんだ。」

一瞬、え?つて顔した雄輔。

誰もいなくなつたグラウンドで

雄輔があたしから田をそらしたまま

おもむろに口を開いた。

「こ前のことなんだけど、

悪かつたな。」

「やうだよ。初めてだつたのこ。」

あんな風じやなくて……

ちゃんと気持ちがつながつてから……

つて言つた方がいいかな……

なんて思つてたら

雄輔の次の言葉にあたしは固まつた。

「 もう、オレに近寄るんじゃないぞ。」

「雄輔・・・今なんて・・・?」

「どうこういって?」

あっけにとりれたといふか

びっくりしたといふか・・・

まさか雄輔からこんな言葉が出るなんて。

なのに雄輔は、

「だからわのまんま。」

オレの手の匂くといひは来んな。」

意味分かんない。

「でないとあかりをこれからも

傷付けちまつ。

そんなことしたくねーから・・・・・・

そつぱつて、雄輔はあたしを残し、

部室へと歩いて行ってしまった。

・・・・何よ…それ。

「マネージャー。」

いつまでも運動場で立ちつくしてたあたしに

小塚先輩が声をかけた。

はつとしてあたしは声のした方を見た。

「何してんの?早く帰らないと・・・・・

途中で言葉を切った小塚先輩。

ん~。どうしたのかな~。つて思つたひ

近付いてきた小塚先輩が

あたしの頬をそつと親指でなでた。

「雄輔に泣かされたの？」

びびった？

代わりにオレが雄輔泣かしてやるナビ~。」

?

気付かぬいうちに

あたしの頬には一筋の涙がこぼれていた。

「う~みんなとい~。~。何でも無いんですけど。

あ~。~。もう帰つますから。~。」

慌てて鞄を取りに戻る。するとするあたしの腕を

小塚先輩が掴む。

「そんな顔して戻らない方がいいと懲つたがど？」

「大丈夫です。」

無理に笑顔を作つてきつぱり言つ。

「んじや、雄輔監禁して

みんなでシバくか。なあ？」

「いや・・・それは・・・」

いくらなんでも可愛そつ。

「じゃ、マネージャーから聞こつかな。

オレはいいぜ。雄輔シバいても。

もちろん俊介も賛成だと思うけど

「

やつぱりこれじゃ分かんないか・・・

「はあ？ 何それ・・・・

端的に答える。

やつやと帰ったかったので

「なんかよく分かんないけど

近寄るなって言われただけで・・・・

値を運動場に座らせた。

何としても聞くぜとほほ笑みながら

・・・・・・・・・・

でも・・・

昨日の「」とは説明しないでこそ・・・

「あの・・・自分でひしゃると話しますから

大丈夫です。」

「出来ねーから泣いてたんだろ?」

やつややつだねど・・・

「やれに近寄るなって言われて

びつやつひ話をむわけ?」

・・・・・・・・・

これから避けられるひと?」

今までそんなひと一度だつてなかつたのに。

「ひじょなこよ・・・雄輔。

「じゃ、ま、す、何、で、近、寄、る、な、つ、て、話、に、な、つ、た、の、?」

「突然。」

「んーー。そ、の、前、に、何、か、あ、つ、た、ん、だ、ろ、?」

「・・・・・・・・」

「何、が、あ、つ、た、か、言、え、ば、分、か、る、ぜ、?」

小塚先輩がじつとわたしの顔を見る。

・・・・言えるわけない。

ファーストキスを奪われたなんて。

黙つてゐるあたしに小塚先輩は  
小さくため息をついて言った。

「えじゅ も、多分雄輔は  
マネージャーを避けるだらうし、  
オレとおも合ひにいきまへ。」

「んな[冗談、言わな]でくださー。」

「[冗談じやな]じかど。」

今[い]のタマミングで口説くとは

どうこの神経?

もしかして失恋したては

口説くチャンスと思つてゐる?

残念ながら[ハ]こののは

あたしはまだせまらない。」

よしー。

雄輔に直接聞いてみるしかないか。

そう決めたあたしは勢いよく立ちあがった。

「先輩、 ありがとうございました。

今から追及してきますー。」

小塚先輩は一瞬驚き、

「あ・ああ。」

いきなり復活してきっぱり言い放つたあたしに

と、曖昧な返事を返してあたしを見送った。

帰ろうとしていた雄輔の背中を見つける

あたしは思いつきつてその背中に向かって

かけ出した。

あたしとあなたの付き合って

昨日今日じゃないんだかんね。

甘く見るんじゃないわよ！

あたしの恋心を。

一方的に言われておしまいなんて

あつえないんだから！

「雄輔ーーちょっと待つてよー！」

あたしは大声で叫びながら

雄輔を追っかけた。

でも、息切れ寸前。

田の前へりへり。

でも追いつかなきや、これから先

びつしても後悔する。

「近寄んなつて言つたろ？」

眉間にしわ寄せた雄輔が

ため息をつきながら言つた。

ちょっと・・・

何であたしがため息つかれるわけ？

「雄輔、勝手すぎー！」

「はあ？意味分かんねー。」

「あたしが何で近寄っちゃいけないのよー。」

一瞬間があいて

雄輔は答えを躊躇した。

「納得出来ないよ。そんなこと。」

あたしはまっすぐに雄輔を見つめた。

「今よりひどいことにならなくねーし。」

？

「お前には分かんねーの。」

「だから分かるよ」  
「うん」と頷いてよ。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「自信ねーから。」

「何が？」

「だから、自分が大事だったたら

オレに近付くな。」

「だから向でよ。」

イライラしながら雄輔に詰め寄る。

ギュッと拳を握りしめた雄輔は

いきなりあたしを抱きしめた。

そしてあつとこつ間に頭が重ねられた。

何度も何度も向きを変え

むきぬるよう口付かれる。

あたしはギャウッと歯を食いしばったまま

硬直していた。

「オレは行動に責任持てねー。」

だから離れてるつたんだよ。」

・・・・・・・・・・

そんなこと・・・・・言われても・・・・



納得できないあたしに雄輔は言った。

「やつやつて歯食いしばつてゐあかりを見たくねーんだよ。」

「見たくねーんだよ。」

そのまま雄輔は全力でその場を走り去った。

・・・・・・・・

あたしは全く理解できない。

何なあれ・・・

2回目は少し余裕もあつたけど

少なくともああいう一方的なのは  
どうしても受け入れられない。

しかも雄輔の行動の意味も分からぬ。

とにかく、側に寄つて欲しくないことだけは理解した。

もちろんそれに納得できるはずもないけど。

「マネージャー、ちょっと。

日々と過ごしていくある日

部活の最中にあたしは部長に呼ばれた。

「はー、なんでしょうか。」

「ちよつと部屋来て。」

練習中に部長が抜けたなんて珍しい……

あたしは部長について行った。

「まあ座つて。」

パイプ椅子に向かい合つて座ると

部長は用件を切り出した。

「雄輔とは仲直り出来たか?」

・・・・・・・・

「仲直りもなにも・・・

喧嘩してないのに・・・

「アイツの悪い詰め方なあ、

ちよつとまざいんだよな。」

・・・・・・・・

「最近特に態度ワリいし。

ま、それは前からだけどな。」

そう言ひて苦笑こする部長。

「マネージャーの仕事でもあんだよ。

メンタルケア。分かる?」

「分かりますけど、近寄るなって・・・

」

「つむじて言ひあたしに

部長はいきなり笑いだした。

「アイツ、とうとうブレー キ壊れたか！」

あっけにとられるあたしに

部長は「コラ」と笑った。

「オレにも覚えあんだ。

まあ・・・・・やつこつ」とか・・・・

一人納得した部長に

全く意味の分からないあたし。

何がどうしたって？



それからの雄輔は

普段通りにしているよつでも

ゼ つたにあたしと皿を合わせなかつた。

それが次第に

あたしの中では不自然に重くなつていつた。

なによ・・・

何拗ねてんのか知らないけど

そんなに拒否しなくていいじゃん。

寂しいじゃん・・・

皿に皿にその想いは大きくなつていぐ。

部活中はまちゅうの」と

勉強しても雄輔が気になつて仕方がない。

「みさと先輩、あたし、もう、限界！――！」

みんなが練習しているときには

あたしは先輩に愚痴つた。

「なんであたし、避けられてんだと思ひます？」

意味分かんないまま

あつとも答えてくれないし

そんなの幼馴染のくせに

卑怯だと思ひませんか？」

いきなり爆発したあたしに

ちゅうじびつくつしたみさと先輩は

「なに? こきなり・・・まだ口聞いてなかつたの?」

なんて目を丸くした。

「俊介が『あいつら両想いだからなあ』

つて、言つたのはだいぶ前だつたのに・・・」

「両想いもなにも・・・

田も合わせてくれないんですよー

ひどこと思こません?」

ふーーっと頬を膨らませて言つあたしに

みさと先輩はフツと笑つて言つた。

「そのまま雄輔くんとつ捕まえて言つてみたう?」

セツヒツと、みさと先輩は

「ちょっと、雄輔くん！」さち来て。」

つて、ランニング中の雄輔を部室に引っ張ってきた。

「ハリーマネージャー、

雄輔の練習メニュー、邪魔すんじゃねー。」

意味深な笑いを浮かべて部長がみさと先輩に言つた。

「急用なの！」

みさと先輩も意味深な目で部長を見る。

二人してニヤッとあやしい笑みを交わすのを見て

何だかちょっといやましかった。

ああいうのを

『田と田で会話する』

つて言うのかなあ・・・

「なんですか・・・？」

みさと先輩に雄輔は問いかける。

もちらんあたしの方は一切見ようともしない。

あれだけ仲良かつたくせに・・・

「あかりちゃんが君の」と

卑怯者って言つてたよ。そつなの?」

「「はあ?」」

思わずハモッてしまつた・・・

そこだけ言ひますか・・・先輩・・・

それはないでしょ・・・



「ちゅうとまで…オレがいつ卑怯な真似したつて？」

マジな顔して雄輔があたしに言った。

おーーー

久々の雄輔の直視。

こんな場面のくせにちゅうと照れるあたし。

「おーーー何とか言えー。」

「はーーーい、続きは部室でどいつ

みんなびっくりしてるから

こんなとこで大声出れないの

あかりちゃん、言いたいこと

ちゅ んと言つた方がいいわよ。」

みさと先輩は満面の笑みで背中を押した。

「ほら雄輔、マネージャーの職について  
ちゃんと聞こえてー。」

「ンなー」と言われなくつたつて・・・。」

「「まこは」」

部長とみさと先輩に押し込められるよいつ

あたしたちは部室へと放り込まれた。

「で? オレが何したって?」

雄輔があたしの前に立ち問い合わせる。

「うこうこうひいて顔から変わんなによね。」

理不<sup>良</sup>いは正面切つて立ち向かいたい所。

「何であたしを避けんのよ。」

静かに言つたあたしに雄輔が一瞬ひるむ。

「避けてんじゃなくつてなあ・・・・」

「やんなのめぐへじごじやん。

最近田も合わせてくれないし。」

「だからそれは・・・・」

口<sup>一</sup>もつて言葉を濁す。

「あたし、耐えられないんだナビ。

「やんと田へりこあわせへよ。」

・・・・・・・・

「ねえ！」

近寄つて雄輔の顔を覗き込んだ。

「やめろー。」

そっぽを向く雄輔。

「イヤー。」

あたしは雄輔の顔を手で挟むと

「逃げてんじやないよー。」

つてじつと見つめた。

「バカ……つたく……しらねーからな。」

いきなりしゃくと抱きしめられて

息が止まつやうになつた。

「暴走しねーようにわざと離れてたのに

その努力を無駄にしゃがって！バカあかり。

」

「それと無視してたのと何の関係が？」

抱きしめられた体制のまま

照れてやけに口が滑る。

それに動悸が・・・

「ほんと、一ノブイのな。

勉強で見るべせに、ひとつ『バカなヤツ・・・』

「ほんとにバカな雄輔に言われたたくないし。」

ああ・・・サラシといつこうかわいくないセリフが

どうして言えてしまつんだら・・・

雄輔の胸がドキドキしてる。

そつとその背中に手を回すと

雄輔の腕に力がこもつた。

「歯、食いしばられると結構へこむんだよな。」

苦笑しながら雄輔が言つた。

「だつて……緊張してたんだから。」

「今は？」

「今も……」

ふーーーと大きく息を吐いて

雄輔はあたしから腕をほどいた。

あたし達は部室の長いすに座つた。

ほんの少し距離を取つて。

「自分で止められそうになかったからさ。」

離れるしかなかつたし。」

ちゅうとさみしぃうに言つた雄輔に

思わずあたしは言つてしまつた。

「止めなくていいの？」

「は？ マジで言つてんの？」

「つーか、意味分かってる？」

驚きとからかいの色をたたえた田が

あたしの眼の奥を覗き込む。

至近距離。

大好きな雄輔の田。

まるで魔法にかかったかのよう

自分で信じられない言葉が口から飛び出した。

「分かつてるって。

雄輔ならいいよ…………。

ずっと好きだつたし…………。

その瞬間、あたしと雄輔の間に会つた距離は

あつといつ間に縮められ

肩を抱き寄せられた。

「後悔すんなよ。」

「するわけないでしょ…………。」

「じゅ…………。」



「いいよな・・・」

小さくうなづいて

ドキドキしながら背の高い雄輔の顔を見つめ

そつと目を閉じたあたし。

今度はちょっと落ち着いて・・・

なんて思ついたら

ガタン！

と外で小さな音がした。

すつと体から雄輔のぬくもりが消えた。

立ち上がるといきなり

ガラツと部屋の窓を開ける。

「うわあー！」

飛びのくように散つていいく人影。

「あいつら・・・・」

苦笑いしながら雄輔はあたしを振り返つた。

「部長たちに、はめられたな・・・・」

「そつみたいだね・・・・でも・・・・」

言葉を切つたあたし。

大きく息を吸うと

「よかつたんじゃない？」

つてにつけりした。

「いつまでも雄輔に避けられてちゃ

精神衛生上悪いし。」

「…………」

「ね？」

「…………」

「いい加減、態度決めねーと

ほんとに逃げられんぞ？」

突然部室の入口が開いて

部長が入ってきた。

「結構じれつたい奴だつたんだな。雄輔。

」

からかうように言つた部長に

「部長ほど軽くないし。」

と、拗ねたように言った雄輔。

「ちょっと強引な方が女の子って嬉しいのよ

なんて後ろからみると先輩も顔をだす。

「ねえ？あかりちゃん」

そこで同意を求められても・・・

ねえ？

「だいたいだなあ、男が逃げるなんて

ありえねーだろー根性無しが！」

「ンなこと言つたって、

責任取れねーもん仕方ねーだろー！

無責任なこと出来つか！」

「じゃ、責任もぢゅいいじゃねーか。」

「取り返しのつかねーこと

しちまつたらどうすんだよー。」

「つづーか、まだだつたのか？」

「・・・・・・・・・・・・

聞いてる方が恥ずかしいよ・・・まつたく。

「案外真面目君だったのね、雄輔くん。」

「普通だろ。」

「俊介ならそんな我慢は絶対しないよね。」

「とーぜん。

ま、オレはそれで一度みさとに振られたんだつけ?」

ニヤッと笑つて答えた部長は

しかし、きつぱりと言つた。

「両思いなのに避けるなんて

バカとしか思えねーぞ。」

え・・?

つてあたしと雄輔は顔を見合わせる。

両想いつて・・?

何で知つてんの・・?

あたしだつてわつと知つたところなのに・・・

「分かつて無いのはお前らだけだ。」

ウソ・・・

あたし達はじつと顔を見合わせた。

「もー そんなに熱く見つめ合つちやつて

見せつけないで一人だけの時にしてよね」

みさと先輩にからかわれて

あたし達は真っ赤になった。

「さ、練習すつかな。」

照れ隠しのよう言つて

雄輔はグローブを手にとり

運動場のキャッチボールの集団に紛れこんだ。

「よかつたね。あかりちゃん。」

みさと先輩が満面の笑みで声をかけた。

「はい。」

照れくさかったけど

めちゃくちゃうれしくて

あたしも満面の笑みで答えながら

ボールを投げる雄輔をじつと田で追っていた。

氣まずい・・・

氣まわし

むかしかんな」氣まずいんだあ・・・!!

今あたしは雄輔と一緒に電車に乗っている。

「なあ、ベタだけど映画でも行かねーか。

何げなく誘われて出かけたけど

手・・・・・・・・・・・・・

いきなり握られたまま

電車の中でもそのまままで、

あたしはちょっと硬直していた。

そんなに混んでいない車内。

手、汗かいたらどうしたらいいの？

これ、いつ離すんだ？

一緒に学校の行き帰りに一人で歩くのとは

何だか雰囲気が違つて、妙にぎこちない。

雄輔もそれから遠くを見つめたまま

何も話さない。

あたしもこいついう時、何話せばいいか分かんなくて

手の先に雄輔を感じつつ窓の外を眺めていた。

あたしはドラマも映画もあまり見なかつたから

特に見たいものは無かつたけど

雄輔はアクションものの映画で見たいものがあつたらしい。

「好きなの選んでいいぞ。」

つて、言われたけど

一人でどんな顔して恋愛ものとか見りやいいの？

ほんとはメロメロの恋愛物みたいけど

無難にシリーズもののアクション映画にした。

あつとこれ、雄輔好きだし。

館内はあまり混んでなくて、

人の少ない真ん中あたりに並んで腰を下ろした。

「一ラとポップローンを前に置いて

始まるまでの間、当たり障りのない話をする。

「これ、雄輔見たことあるんでしょ？」

「ああ。前回は、たしか決着が付かず終わってた。

ヒロインがさらわれたけど、

あれもどうなったか分からずじまいだったかな。」

「へえ……」

話しているうちに館内の証明が落とされた。

一瞬周りが見えなくなる。

・・・と、雄輔がちょっと体を浮かせた。

ん?どこに行くの?

と思つたら、不意にあたしの皿の前に

雄輔の影が覆いかぶさる。

一瞬何が起つたか分からなかつた。

雄輔は何事も無かつたかのよつて

また席に着いて前を向いている。

・・・・・・・・・

あたしは、やつを一瞬通り過ぎて行つた

唇への柔らかい感触と暖かさを

無意識のうちに左手でなぞつていた。

ドキッ・・・・・

前を向いたままの雄輔の手が

そつとあたしの右手に重なった。

その手が触れた部分は

心臓のようにやけにドキドキした。

結局雄輔の手が気になつて

映画には集中できずじまい。

アクションシーンで「ドキドキするものなんだわ」など

あたしはずつと別の意味で「ドキドキ」した。

長じて一緒に大きくなつてきたのに

友達でいるのと

いつもやつて付き合つて「デート」しているのとは

全然違うんだね・・・

「腹減つたあ！」

映画の後、雄輔はいつになく優しい表情で

あたしを見つめた。

その眼差しにドキッとまた心臓がはねる。

## ファーストフードのお店に入り

店内から通りを歩く人たちを眺め

ハンバー ガーをむしゃむしゃ。

ま、大口開けて食べても

相手が雄輔だから

大丈夫でしょ。

幼馴染だと楽かも・・・

「雄輔、ちよつと海でも見に行く?」

۱۰۷

地元には定番のデータコース。

そういえば、いつぞやの部長たちのデータは

海だったっけ……

シーズンオフの海は

優しく風いで、穏やかな時間が流れる。

大きな流木があったので

その前に座るとちょうど背もたれみたいになつた。

一人並んでじっと遠くの波を見つめる。

「静かだね……

「ううだな……

雄輔の腕が肩に回る。

スッと抱き寄せられて

一瞬体が固まつたけど

そつと雄輔の肩に頭をもたれさせた。

ちうりと雄輔の顔を見上げると

照れくさそうにニッと笑つてた。

幸せ・・・・・

何だか生まれて初めてそんな気がした。

10月になつた。

あたりはすっかり紅葉に包まれ、

学校はとことん文化祭の季節を迎えた。

あたしのクラスは

みんなのやる気と熱意で

なぜか「ファッションショーをする」となつた。

しかも・・・！

「チャイナドレスがいいと思こますー。」

「AKBの衣装やつてーー！」

「なでしこジャパンもいいたじやねーの？」

と意見が出て

「じゃ、誰が担当しますか？」

とこいつ委員長の発問に対し

男子がオレもオレもと名乗りをあげた。

・・・・・・・・・・

もしかして彼らこいつこいつ気があつたとか？

女子はひそひそと話してたら、

実行委員を引き受けていた西尾くん、

「お前らもやるんだぜ。」

ヒーッコ。

「え――――――――――」

と、大ブーイングをものともせず

AKB40（「つかのクラスは40人）とここに」とで  
フリフリキラキラの衣装を制作することになった。

スカート短いし・・・

こんなのみんなで着るの？

みんなで分担してミシン掛けをしながら

友達と愚痴る。

更にみんなの私服を持ち寄つて

衣装合わせ。

「オレ、これこするー。」

「んじゃ、オレはこれー。」

田をキラキラさせたスカートを身につける男子を

あたし達はあっけにとられて

見つめは、大爆笑。

「オレは絶対イヤだな。」

あたしの話を聞いて雄輔は苦笑い。

「あいつら、そんな趣味があつたのか。」

「そういうわけじゃないらしいけど、みんなでやれば怖くないみたいな？」

「へー。」

「雄輔のクラスは模擬店すんだよね。」

「そ。聞いて驚け。ホストクラブだつてさ。」

「は? なにそれ・・・絶対行くから。」

「…………」

雄輔は気乗りしないみたいだけど

お密に囁いてぱい愛想ふりまいて

出来れば彼女ゲット なんて

企んでたりするらしい。

言い忘れてたけど

雄輔は花の男子クラス。

そりゃ、やうこいつ企画で女子と触れ合おう。

とこつ空氣も分かる。

ふーん

そ う な ん だ あ

ち ょ つ と 複 雜

・ ・ ・ ・ ・

「それから、オレ、バンドすんだあ  
絶対見に来いよ」

「うそ……、雄輔音符読めないくせに?」

「うぬせーむ……」

音楽のテストではいつも無きを見ていた雄輔。

ピアノが弾けるあたしと違い、

音符は意味が分からないうらしい。

なのにバンド?

「何のパート?」

「ボーカル。」

「カラオケだと思えば雄輔でも出来るかもね……」

「お前なあ……」

ま、当田聞いて驚け！」

ケツケツケツと笑う雄輔に

「歌詞忘れちゃダメだよ。

何ならカンペ持つてたげよっか」

つて言つたら、

「んなもんいるか！」

つて、頭クシャクシャつてされた。

「もーー…やめてよー！」

つて言いながらも笑いが止まらない。

雄輔がボーカルだつてえ？

冗談！

文化祭は、結構カツプルでの行動も出来る。

雄輔とあたしはかるうじてかぶつている

休憩の2時間を一緒に回る約束をした。

文化祭は一日あるのに

たつた2時間しかないのも寂しいけど

ほなみと雄輔のクラスの模擬店に行く約束もしたし

とっても楽しみ

準備のかいあつて

あたし達のクラスは

青いジャージのなでしこや

キラキラフリフリAKBやチャイナドレスに

メイド喫茶の店員、KARAまで

そのまま仮装が出来あがつた。

BGMに合わせて踊る姿は

やつてゐあたし達も笑えた。

あつといつ間に文化祭は当日を迎えた。

準備は万端。

あたし達は「機嫌で衣装に身を包み

『一 arrivしゃいませ』

と、お客様を呼び込みしていた。

結構好評で、ステージが始まる「いにば

教室は超満員。

大音量で音楽が流れるなか、

おぞろいの衣装で全員がパテーションの陰から

みんなの前に飛び出した。

「一」という歓声を受け

あたしたちも曲で歌わせて踊った。

あたし達よりも

男子がノリノリで踊つてた方が

みんなの注目と笑いを集めていたナゾ。

「可愛いいー！」

とこのお姉ちゃんの顔にみんな笑顔をよくして

このままの衣装で文化祭の

他の教室を回ることにした。

「やつと伝伝にもなるだ。」

みんなも盛り上がる。

この一体感が文化祭の醍醐味かもしれない。

あたし達は自分たちも爆笑しながら

それでも出番にまかせんと眞面目」

ステージをこなした。

「あつらに面白かった!!」

ところの感想に満足。

30分の入れ替えを挟んで

第2回目のステージ。

噂を聞きつけた生徒たちが

ますます増えて、

教室はなんとも言えない熱気に包まれた。

そして、3度目のステージ。

ステージの最前列に雄輔がいた。

向こうもびっくりした顔してたけど

あたしはもつと驚いた。

だつて・・・・・

雄輔の格好・・・

スーツ着てる・・・・

しかもちよつと着崩して。

ヤンキー座りもれもになつてゐる雄輔に  
どひしても視線が行く。

目が合ひつと、ニヤッと笑つてた。

やつにくこなあ・・・・・

こんなブリブリの衣装だし・・・・・

KARAのまねしてお尻フリフリなんて

めりひや恥ずかしいんだけど・・・・

あたしのキャラじやないし・・・・

ま、サッカー部やバスケ部の男子たちが

お尻フリフリしてゐるよつは

可愛じとは思ひたゞや。

ちょっとと冷や汗かきながらステージが終わると

「すげー気合入ってんじやん。」

つて、雄輔が声掛けてきた。

「その衣装、着たままで来いよ。」

なんて言つて雄輔は自分の教室へと戻つていった。

これから1時間の休憩。

あたしはほなみと一緒におそろこの衣装のまま

約束通り雄輔のクラスの模擬店へ。

「ちょっと・・・」「入んの?」

「せう・・・だけど・・・」

ふたりして一瞬立ちどまつたのは

## 人口の派手な装飾。

もう節電はいいのか？つてくらいピッカピカ。

誰かが家のクリスマス用イルミネーション、

全部くじけたでしょ！

て  
感  
じ

うーーん、なになに？

ワンドリンク制。10分一本勝負？

なんじやそれ？

いきなり両側から思いつくり伸びした衣装の

## 男の子たちがやつてきて

あたし達の中に強制連行。

「ち・・ちゅうとおー。」

「まあまあ、そう言わずに」

ニッヒと笑つたのは野球部の沖田くん。

「げ・・・何その格好・・・」

「別人だねえ・・・・」

ちなみに沖田くんもあたしたちは

小学校の時から知つてゐる。

心なしか、ほなみの頬が赤い。

「おー・それ俺の客だからー。」

嬉しそうな顔して雄輔がすつ飛んできた。

「うらちだ。」

有無を言わせらずあたしの肩を抱いて

席までエスコート。

隣にはほなみと沖田くんも座った。

「来てくれてうれしこよ。」

「やべくつして欲しこと」「だけど、

10分楽しんで行つてね。ようじへ。」

甘～～いほほ笑みを浮かべる雄輔と沖田くん。

以前買つていた食券のクリームソーダーを

オーダーする。

「その衣装、すうじに似合つてゐよな。

スゲー可愛いよ。」

え? 今の沖田くんのセリフ?

沖田くそつて、そんなキャラじやなかつたよね? . . .

ほなみは照れて真っ赤になつている。

ギョッとしたあたしに

「お前も可愛いぞ。

」のままだつかに泣えてへへりこだ。」

なんて、じつと見つめられる。

な・・・なによ・・・これ・・・

不覚にも顔が赤くなるのが

びつても止められなかつた。

所詮模擬店つて分かつてんのに・・・

「さつきのステージもかわいかつたなあ。

それに足も綺麗し

「一々一々しながら沖田くんは

ほなみの皿を覗き込んだ。

「あらがと・・・

トマトみたいになつたほなみは

小さな声で言つた。

「冷たいうちにこれ飲みなよ。

「うまいぜ。」

雄輔に勧められてクリームソーダを

口にする。

「なあ、オレにも一口くれねー？」

そう言つて、雄輔はあたしの方に体を寄せ

ストローを咥えるとさあさうとジュークを飲んだ。

「あーーー…それあたしのー！」

それって…・・・あたしのストロー・・・

「おこ・・・雄輔、やつすぎだつて・・・

沖田へんまちよつじびつへり。

「へんなー。いいの。」

一チヒ笑つてあたしの肩を抱く雄輔。

・・・・・・・・・

思わず忘れそう・・・

ここが教室で、

## 今は文化祭の真っ最中で

これは模擬店で……でこれを

アームが鳴った。

「はーい、あつがとうございました

また来てくれんの待てる世

• • • • •  $\#T, \#T, \#T, \#T, \#T$

あたし達は残つていたジュースを一気に飲み干し

教室から送り出された。

「すゞ」いね・・・あいつら・・・

「うん……」

はあ・・・とため息ついて一人で顔を見合せた。

振り返ると、目がハートマークのリピーターも

噂を聞いた生徒たちも

長い列を並んで待っている。

帰りがけにむりと教室の中をのぞく。

雄輔たちはまた、新しいお密相手に

笑顔を振りまいていた。

なんとなく胸の奥がざわめく。

他の人に向ける笑顔が

胸の奥に突き刺さった。

文化祭の出し物だし……

仕方ないじやん。

あれは作つた笑顔だつてば。

必死に言い訳しながらも

分かつっていてもドキドキしてしまつた事実に

びつてしまつもなく動搖をせられた。

ほなみはとこいつと・・・

「沖田のくせにあんなにカッコよく見えるなんて

反則だわ・・・」

つて、ポ つとしてる。

あの氣の強いほなみが？

「ほり、 休憩終わるよー・

遅れちやつ、急げー・」

あたしはほなみの手を引っ張つて

教室へダッシュ。

心もちひきつた笑顔のまま

またワシステージになしたのだった。

その後、多目的教室にほなみと行った。

今からバンドのステージが始まる。

「まさか、あの格好のままじゃないよね・・・」

「それはないです。」

「お待たせしました！では・・・」

司会者が説明を始める。

大音量の音楽と共に雄輔たちが

ステージに飛び出してきた。

うわあ！

実にコミカル・・・・

ジーパンにパークー。

## いつもの雄輔。

キラッと耳にはピアスが光る。

黄色の粗い粗縫に包まれ

雄輔はステージを駆け回る。

あ、心がちゃんと通せられてるみたい。

歌詞も覚えてるじゃん。

有名なバンドの曲を「コピー」して

会場も一緒に大盛り上がり。

会場の盛り上がりとは反対に

あたしはじつと雄輔を見つめていた。

グラウンドとは違つ雄輔の姿に

正直、心を持つてかれた。

ベースやキーボードの子たちとの絡みも

「ミカルでテンポがよくて楽しそう・・・。

「ありがとう――――――！」

満面の笑顔で手を振りながら

みんなの声援にこたえて退場する雄輔たち。

いつもと違う雄輔の姿。

昔から知ってる雄輔の顔じゃない。

あたしの胸は壊れたんじゃないかって思うくらい

ドキドキしつぱなしだった。



妙な高揚感の中、

あたしは雄輔との約束の場所に向かった。

約束してたんだ。

一緒に文化祭、まわるうつねつて。

「よつ！」

模擬店の衣装のまま

雄輔があたしに声をかけた。

一瞬心臓が飛び跳ねた。

この時間には、いろんな模擬店も

叩き売り状態になつてくる。

売れ残りが出ないよう

外に出て売り子をする人も出てきた。

「これどうですか？美味しいですよ」

女の子が数名、雄輔の前にやってきた。

雄輔はちらりとあたしを見ると

「どれがいい？」

つてあたしに問いかけた。

か』の中には数種類のクッキー。

「…………チ『』のがいいかな。」

「んじゃそれ。」

雄輔が買ったクッキーを早速開ける。

「そこ座らうぜ。」

雄輔に促され、ベンチに座る。

スーツ姿の雄輔がいつもと違つて

大人びて見えた。

「ほら、食えよ。うめーぞ。」

「ありがと・・・」

ポロポロと胸のあたりに粉がこぼれた。

「いほすんじやねーの。」

雄輔が笑いながらこぼれたクッキーの粉を

胸元から払う。

「ややつー。」

思わず小さく声をあげる。

だつて・・・

胸元に触れた手の感触は

あたしにはあまりにも刺激が強すぎて・・・

しかもあたしも、雄輔のリクエスト通り

といふか、時間ももつたいなくて

ステージ衣装のまま。

胸元は大きく開いて素肌だった。

いつきに鼓動が倍のスピードで打ち始める。

「あ・・・ワリい・・・」

真っ赤になつたあたしを見て

雄輔も真っ赤になつた。

「そんなんもうりじゃ・・・」

一人真っ赤になつたまま

「そろそろ、向こうで次のイベント始まるころかな。」

なんて立ち上がると

「行こ」

つて、雄輔の手を引つ張つた。

こんなとこにずっと座つてたら

心臓が持たない。

まだ胸には雄輔の手の感触が残つてて

じつとしてるわけにはいかなかつた。

真っ赤になつて死んじゃいそう……

「そりだな……」

雄輔も立ち上がり、

「さやかな音のする方へと視線を向けた。

2年生のどいかのクラスが

「さやかにマイクで叫んでる。

「ぜひ参加したい方ないですかあ！」

豪華な景品付きです！！！」

「ぜひ桜を仕込んでるとま思つね」

何人かがステージに上がる。

借り物競走みたいで、ステージ上のテーブルには

封筒がいくつも置いてあった。

それがまた、尋常じやなくデカイ・・・

中には段ボールに書かれたお題が入っているらしい。

それを首にかけて借り物を探すそ�だ。

「あんな格好して走るの無理だな・・・」

苦笑しながら雄輔が見物を決め込む。

「あたしはちょっと豪華景品が気になるけどな。」

くすっと笑つてスタートする人たちを見ていたら、

なんと・・・

とんでもない札が続出。

『学校中で、一番怖い先生。』

『他の人は知らない秘密がある人。』

『一晩一緒に過ごしたい人。』

『自分と体重の差が10キロ以上ある人。』

『学校中で一人しか出来ない特技がある人。』

『一股かけたことがある人。』

『キスの「つまい人。』

『自分と両想いの人。』

・・・・・・・・

「これって、合格を誰が判定すんだよ・・・・

「マジ?」

舞台上では一瞬出演者がひきつった顔をした。

そりゃそうだろ。

どうやって探す?

誰が考えたか知らないけど

誰を連れて帰つてくるか楽しみ

・・・と、見物を決め込んだ

『一緒に来てください！』

一人の女の子が雄輔の前に立つた。

「え？ オレ？」

「はい、 そうです！ 早く！」

勢いに押されて、

雄輔は彼女の後ろを走つてついて行く。

びっくりしたけど

そのあと、あたしは啞然とした。

彼女の首から下がつていたお題は・・・

『一晩一緒に過ごしたい人。』

□

・・・・・

「なあ、怒んなよ。」

「怒つて無い。」

「んじや、そんなにムズッとするなよ。」

「してなこでしょー。」

「ほりあい・・・・怒つてんじやねーか。」

・・・・・

怒るなつて言つ方が無理でしょ？

ステージに連れ去られた雄輔は

「いやあ、公衆の面前での

『一晩一緒に』『言はながですか？』

と、司会者に問われ

祈るような視線の彼女に

「嬉しいです！」

と元氣よく答えた。

そりやね・・・

それ以外の答えは空氣壊すよ。

分かってる。

分かってるけど・・・

あたしが怒るの、間違ってる?

「ほれ、これお前にやるから機嫌直せよ。」

と、雄輔は参加賞の可愛い付箋を差し出した。

あたしがみの甘い色合の可愛い付箋・・・

だけど、それがあの

屈辱の時間の代償だなんて

見るのもイヤだと思ったあたしは間違つてますか？

「そんなモノもらいたいわけないでしょ！」「…

あたしの雄輔が一瞬でも

他の子と並んでみんなの前にいたことが

どうしても納得できなかつた。

ただのヤキモチつて分かつてゐる。

分かつてゐるんだけど、

どうしようもないんだから仕方がない。

「ちよつと座れ。」

いきなり雄輔は近くの校舎の階段に

あたしを引っ張つていくと

グイッと引つ張つて座らせた。

「何よー。」

自分の胸の嵐が抑えられず

そっぽを向くあたし

雄輔は「へ、自然にあたしのあいに手をかけると

そのまま文句を言いかけたあたしの口

そつと唇を重ねた。

・・・・・何この気持ち・・・・

すと怒りの塊がどこかに消えてく。

甘酸っぱい気持ちが胸の奥から湧き出してきて

切なくなつた。

「心配すんな。

あかりしか好きになんねーから。」

耳元でそつと囁かれて

あたしはその甘さにクラクラ・・・・

約束だよ・・・

絶対だかんね・・・

「うとう・・・・・信じらさんねーーわざと来いよーー。」

「ンなこと言われても・・・。」

「いいからー。」

ケータイを耳に当てながら

必死こいてあたしは改札を通り抜ける。

あーーー、

慣れないパンプスが走りにくい・・・ーーー！

ホームからは電子音が聞こえて

「間もなく、列車が参ります・・・。」

とアナウンス。

精一杯足を動かして階段を駆け上がる。

「あ・・すいません。」

雄輔が車掌さんに謝る。

体半分だけ電車に乗つてドアが閉まらないように  
待つてくれた。

「お前なあ・・・今日くらじ早く起きらんねーか?」

動きだした電車の座席にぐつたりと腰かけて

あたしは大きく息を吐いた。

いつしか必死の受験生生活も終わりを告げ

晴れて大学生となつたあたし達。

入学式の朝、目覚めて慣れないスースに身を包み

初めての化粧をして家を出た。

ちやんと時間に間に合つたのよ？

間違いなく。

でもね・・・

「ヤダあア・・・電線・・・」

自転車のペダルにつかり引っ掛けたストッキングは

遠慮なく電線を伸ばしてくれた。

慌ててコンビニでトライレを借りてはき変える。

でも、トイレで着替えなんて

メツチャしにくく・・・

しかもスース。

慣れないパンプス。

何とかはき変えて慌てて駅へ向かつたけど

遅刻しそうになつたのは突発的事故のせいだと思いたい。

だつて・・・

伝線したストッキングで雄輔と歩ける?

おかげであたしは

あこがれのキャンバスライフを

雄輔のあきれ顔を見ながら始めることになつた。

入学式を終え、

初めてのキャンパスを雄輔と散策する。

「君たち新入生だよね~」

「つか寄つてかなーい?」

「お菓子もあるよ」

わらわらと寄つてきた

先輩らしき人たちに囲まれて

びっくりしている間に

腕を取られ、椅子のあるところに

座られた。

ん?

落研？

「一緒に寄席やんなーー?」

「「せつませ。」」

あたし達は即答し、

れつやとれの場から離れた。

「落研なんて、ほやんないよね。

俺、せひじてニースで汗かいだせ。

「あいかわってきました

ちよつといケメンなお兄さん。

あたしが口を開く前

「やべてやべーー!」

雄輔が腕を掴んで突っ切った。

時間的なものか、

学食には人がまばらだった。

あたしと雄輔は窓際の席に座つて

自販機のコーヒーを飲んでいた。

「大学つて、すさまじいね・・・」

「あかりがボーッと歩いてつからだ。」

何げなく言われて

ちょっとムカツ。

どっちへ行つていいか

まだ分かんないんだから  
しうがないじゃん。

「時間割、どうやって作るんだ?」

意味不明なんだけど・・・」

受け付けで貰つた大きな封筒の中には

来週までに時間割を作り

履修履歴を提出するよ」と

たくさんの資料が入つていた。

雄輔が大きな表を見ながら

ため息をつく。

初めて見る大きな表に

どうしていいか分からず困惑つていると

「あら、一年生ね？」

履修表で困ってるの？」

と、数人のお姉さんたちがやつてきた。

「「」の先生ね、毎回レポートがあつて結構大変だったよ。」

「あ、この授業は、

教授の書いた本読んどけば

楽勝で単位とれるからお勧め」

「「」の先生、面白いよお

しかもイケメンだし」

聞きもしないのに、あれこれと情報を教えてくれる。

で、

「あたしたち、軽音部なんだ

一緒にやんない?」

と、声をかけてきた。

「やんないけど、これ、

もうちょっとおせーてくれるない?」

「口上と笑って雄輔がお姉さんと言つた。

「いいわよお

でも気が変わつたら入つてね。」

と、お姉さま方は時間割を組み立てるまで

ああだこうだと教えてくれた。

おかげで仕組みを理解出来た。

出来たけど・・・

「サンキュー おねーさん 」

と手を振る雄輔と、

「またねー 雄輔くん 」

と手を振り返すお姉さま方を

あたしは複雑な思いで見ていた。

「もしかしてやあ・・・」

「ん?」

帰りの電車であたしは氣になっていたことを聞いた。

「軽音のおねーさんたちと

ケータイ番号とか交換してたでしょ?

あれに入らうとか思つてんの?」

へ?つて顔して雄輔が言つ。

「んなわけねーだろ。

オレ、入る部は決めてつか。」

「うそ・・・聞いてないけど？」

軽く落ち込む。

昔つから雄輔つて自由なヤツだったけど

今も変わんない。

仮にもあたし、彼女だよね・・・？

教えてくれてもいいと思つけど？

「あかり、何年オレといるんだよ。

オレが野球以外するわけねーつーの。

マネージャー、しつかりしろよー。」

そう言つてニーッと笑うと

コジンとあたしの頭を小突いた。

翌日、あたし達はグラウンドの奥にある

野球部を訪ねた。

「おー! もしかして入部希望?」

わらわらっと雄輔の周りに人が集まる。

「野球やつたことあんの?」

問われて雄輔は足もとに見えたボールを拾い上げた。

「ちょっと受けてくれる?」

そういうと雄輔は

抱いでいた荷物をあたしに渡すと

グローブを受け取り

グラウンドへ。

バシッと心地いい音がして

雄輔の球が相手のグローブに収まった。

「へー、いい球投げるじゃん。」

「あんたもな。」

久しぶりのボールの感触が

嬉しくてたまらないような顔をして

雄輔が球を投げる。

懐かしい・・・

それに、やつぱり、カッコいいな・・・

あたしの甘い視線とは裏腹に

先輩たちは好奇の視線で雄輔を眺めていた。

「アイツ、ちよつと変わってんな。」

「あの、悠斗の球受けんぞ。」

みんなが囁く中

雄輔たちのボールの速度は

みるみる速くなつてこく。

「おっしー! 入部届け書ことけ。」

やがて戻ってきた雄輔は、

悠斗をひとせりひたてまわせ、さりげなく前を書いた。

「んで、もう一人いいだろ?」

「誰だ?」

「マネージャー。」

雄輔があたしに紙を回せりとしたら

すつと悠斗を手にそれを引きあげられた。

「ワリいが、女は入れねー。」

「コイツはマネージャーとして・・・」

「だから女はいらねーつづってんの。」

・・・・・・・・

「いに女のマネージャ  
はいらねーか。」

スパツと切り捨てられてあたしは

何一つ返す言葉が無かつた。

「んじゃ、オレも・・・」

と言いかけた雄輔に

「いいよ。別に。応援くらいは

「ここにいたつて出来るし。」

そう言つてあたしは雄輔の背中を叩いた。

「雄輔は野球やるつて決めてんでしょ。

やんなよ。応援するからだ。

そう言つてあたしは精一杯の笑顔を作つた。

\* . . . 。 0 . . . . \* . . . 0 \* . . . 0  
: ' . \* . . . 0 . . . . 0 \* . . . 0 . . . 0

正直、あたしだつてがっかりした。

高校時代を思い出して

またあんな風に一番近くで

雄輔のボールを追う姿を見てたかつた。

ま、でも、今はつきあつてゐるわけだし、  
男ばかりの方が

変な心配しなくていいかもしないや。

そう思つてあたしは、

ずっとやりたかったバイトをすることにした。

「いらっしゃいませ～！」

念願だったファーストフードの店へ。

やつてみたかったのよね

制服も着てみたかったし、

そんなに難しそうじゃなかつたし。

大学の近くのお店で採用になつたあたしは

雄輔が野球してる間、

バイトに入った。

で、一緒に待ち合わせして電車に乗る。

これでお互い時間の使い方、

ぱつちつぱつぱつぱく行くよな。

そんな風に思つてた。

実際、うまく行つた。

最初はね  
・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1444v/>

---

この先の結末

2011年11月20日00時46分発行